

令和7年度 厚生労働省 老人保健健康増進等事業  
「認知症施策推進基本計画に基づく認知症施策の推進の  
あり方に関する調査研究事業」

「新しい認知症観」って  
よく分からない

普及啓発って  
講演会以外に何ができるのかなあ...

そんな自治体担当者におすすめ！

## 「新しい認知症観」の 普及促進に向けて

～全国の多様な事例をもとにした活動のヒント～

令和8年3月  
株式会社 日本総合研究所

# はじめに

## 1. 本事例集作成の狙い

本事例集は、「新しい認知症観」の普及に向け、全国各地の多様な取組をご紹介します。主な読み手は、各地域で普及啓発の企画・実施を担う自治体の認知症施策担当者を想定しています。あわせて、地域で連携して取組を進める多様な関係者にも参照いただけるよう工夫しています。

本事例集は、取組の“正解”を示すものではありません。各地域で、認知症の人と家族等が大切にしていることを起点に、暮らしにかかわる関係者が認知症の人と家族とともに対話しながら取組を企画・実施し、振り返りを踏まえて改善していくために、それぞれの事例のプロセスからヒントを得て頂くことを狙いとしています。

## 2. 新しい認知症観とは

認知症施策推進基本計画において、「新しい認知症観」とは、「認知症になったら何もできなくなるのではなく、認知症になってからも、一人ひとりが個人としてできること・やりたいことがあり、住み慣れた地域で仲間等とつながりながら、希望を持って自分らしく暮らし続けることができる」という考え方である。」と説明されています。

一方、この説明が単に文章として共有されるだけでは、実感的な理解にはつながりません。実感に伴う理解は、認知症の人が暮らし、活動する場所において、認知症の人と家族等と出会い、ともに過ごし、対話を重ねる中で育まれます。

本事例集では、こうした実感的理解につながる取組が、どのように生まれ、広がっているかに着目して整理しています。

## 3. 本事例集の特徴

### (1) 方法・対象・主体が異なる多様な事例の掲載

私たちは、身近な人やメディア等を通じて、認知症や認知症の人に対して、一人ひとり異なるイメージを持っています。そのため、講演会や上映会といった従来型の取組だけで、必ずしもそれぞれが抱く認知症観の刷新・新しい認知症観の普及を図れるわけではありません。特定の手法ありきではなく、対象や場面に応じて、どのように届けると、自らが持つ認知症観への問いが生まれ、新しい認知症観の実感的理解が促されるかを具体的に検討できるよう、本事例集では、手法や対象の異なる多様な事例を取り上げています。さらに、多様な主体の連携により、より効果的な展開につなげている事例も掲載しています。

### (2) 対話と協働が生まれるプロセスを重視

認知症観の転換には、知識としての理解に加え、認知症の人と出会い、対話し、ともに取り組む経験が重要です。本事例集では、対話や協働を通じて取組を企画・実施し、振り返りを踏まえて改善していくプロセスが見える事例を中心に掲載しています。あわせて、取組の結果だけに注目するのではなく、取組を企画・実施し、見直すプロセスを通じて認知症観がどのように更新されていくかにも着目しています。

## 4. 取組のポイント

多様な事例を調査する中で見えてきた取組のポイントを、以下に紹介します。

### (1) 現場に出向き、出会いと対話を起点に企画する

新しい認知症観は、文書や情報として理解するだけでは実感として定着しにくいものです。したがって、認知症の人が暮らし、活動する場所に出向き、出会い、ともに過ごし、対話を重ねることを、普及啓発に関する取組の起点とすることが重要です。本人や家族等との対話やともに過ごす経験から得られる気づきを企画に反映することが、地域における新しい認知症観の実感的理解につながります。

### (2) 「困りごと」だけでなく、「大切にしていること・可能性」を起点に考える

困りごとへの対応は重要ですが、それだけに焦点を当てると認知症の人を一面的に捉えかねません。本人が大切にしていること、楽しみ、役割や強みによる可能性を起点に語ることで、周囲の受け止め方が変わり、参加や協力が生まれやすくなります。

### (3) 行政単独ではなく、多様な主体と役割分担して広げる

認知症の人や家族等との対話を軸に、多様な主体と役割分担・連携しながら進めることで、取組の継続性と広がりを高められます。関係者が「自分ごと」として関われるさまざまな役割や参画の形をともに探索していくことが鍵になります。

### (4) 小さく始め、振り返りを通じて更新し続ける

最初から整った形を目指す必要はありません。身近な場や資源を活用して着手し、実施後の振り返りや対話を通じて改善することが、地域に合った形を育てます。成果だけでなく、プロセスで得られた学びを次の企画につなげていくことが大切です。

## 5. 事例類型の考え方

本事例集では、各事例の特徴が伝わりやすいように、次の3つのタイプに分けて紹介しています。ただし、この分類は便宜的なもので、実際の取組ではタイプ同士が重なることもあります（例：①の取組の実施プロセスにおいて交流や体験が生まれる場合がある等）。そのため、この分類は目安としてご参照ください。

- ① **共生・活動型**：新しい認知症観の普及・啓発を目的とせずに実施されているが、日々の生活・活動等を通じた実感的理解・気づきにより、実質的な意識変容・行動変容のきっかけとなる取組
- ② **交流・体験型**：新しい認知症観の普及・啓発を明示的には掲げず、認知症の人との交流・体験・協働等を通じて、実質的な意識変容・行動変容のきっかけとなる取組
- ③ **普及啓発・イベント・制作物型**：新しい認知症観の普及・啓発や認知症に対する実質的な意識変容・行動変容を目的とした取組

# 目次

## ■ 新しい認知症観についての関係者のメッセージ ..... P05

## ■ 各地域で広がる多様な取組事例



### 共生・活動型

#### 01 岐阜県各務原市「企業や大学生と連携して取り組む農福連携事業」..... P07

「にんじん収穫体験」や「はたけサロン」を通じた認知症の人の活躍の場づくり

主な関係者 大学生、認知症地域支援推進員、農業協同組合(JA)

#### 02 熊本県「認知症の人と県庁職員が同じ職場でともに働く」..... P11

熊本県認知症施策・地域ケア推進課の会計年度任用職員として認知症の人が活躍

主な関係者 -

#### 03 なでしこガーデンデイサービス「ソフトボールの試合を通じた学生との交流」..... P15

「学生たちとソフトボールをしたい！」という声を受けて始まった医学部生と認知症の人との定期戦の開催

主な関係者 大学生、大分県・大分市職員、若年性認知症支援コーディネーター、認知症地域支援推進員、医療機関・介護事業者

#### 04 一般社団法人 人とまちづくり研究所「奈良県天川村等での「可能性指向」の推進」..... P19

課題より可能性、ささやかな幸せと知恵を見つめあうことから出会い直し、地域づくりへ

主な関係者 行政、地域包括支援センター、ケアマネジャー、その他専門職、地域住民、地元企業

コラム ● 日本認知症官民協議会 認知症バリアフリーワーキンググループ  
「認知症バリアフリー社会 実現のための手引き」 ...P23



### 交流・体験型

#### 05 神奈川県「認知症ご本人とつながろう！かながわオレンジ大使との交流会」..... P25

企業とともに、認知症の人の思いを形づくる取組

主な関係者 企業、NPO法人

#### 06 福岡県福岡市「認知症フレンドリーシティ・プロジェクト」 ..... P29

「支援」から「活躍」へ、まち全体の認知症観を更新

主な関係者 企業・団体、医療・介護福祉事業者、小中学生/小中学校

※いずれの事例にも認知症の人とその家族が参加しているため、「主な関係者」には認知症の人とその家族以外の主体を記載しています。

コラム ● 高校生と認知症の人が開発「認知症にやさしい社会へむけたポジティブすごろく」...P33

コラム ● 福岡市認知症フレンドリーセンター ...P34

#### 07 神奈川県相模原市「認知症の人の協力のもと保育園行事を実施」..... P35

認知症の人と園児と一緒に活動することで生まれた役割と地域のつながり

主な関係者 相模原市立上矢部保育園、相模原市在宅医療・介護連携センター、地域密着型通所介護事業所

#### 08 NPO法人かしわのもり「鹿追高校×れんがの家 実践授業での世代間交流」..... P39

認知症の人と高校生が出会い、共通点を見つけて活動し、振り返り、気づきを地域に広げる活動

主な関係者 鹿追町、高校生/高等学校、認知症対応型通所介護事業所

#### 09 株式会社アイセイ薬局「認知症サポーター養成講座から広がる取組」..... P43

全社員を対象とした認知症サポーター養成講座の開催や介護施設での実習の実施、認知症カフェの運営

主な関係者 介護事業所(グループ会社)、地域包括支援センター



### 普及啓発・イベント・制作物型

#### 10 神奈川県大和市「認知症とともに生きる旅のガイド・写真展」..... P47

認知症の人の「日常」や「暮らし」、「希望」をユーモアのあるイラストや写真で展示

主な関係者 若年性認知症の自主グループ、認知症地域支援推進員、NPO法人

コラム ● 動画制作「認知症とともに歩むまち やまと」... P51

コラム ● 大阪・関西万博～HEALTH DESIGN  
輝き、生きる。Live Brighter～「新しい認知症観」を未来へ！... P52

#### 11 高知県高知市「認知症のわたしのくらしのくふう展」..... P53

認知症の人や家族、専門職が生活の中で、実際に取り入れている「くらしの工夫」の展示会

主な関係者 高知県、認知症地域支援推進員、専門職、ミーティングセンターKOCHI、医療機関・介護事業者

#### 12 公益社団法人 認知症の人と家族の会「こども向け認知症サイト」..... P57

認知症を「遠い話」ではなく身近な出来事として知り、理解を深める

主な関係者 小中学生/小中学校、教育関係者、専門職

#### 13 慶應義塾大学・早稲田大学「だいたいおつけー展」..... P61

認知症の人が生きる世界の豊かさに突き動かされた学生たちによる作品の制作・展示

主な関係者 大学生/大学、福岡市・福岡市認知症フレンドリーセンター、若年性認知症支援コーディネーター

## 新しい認知症観についての関係者のメッセージ

以下は厚生労働省委託事業「共生社会の実現を推進するための認知症基本法の広報及び認知症施策推進計画の策定促進に向けた広報」における「都道府県・市町村における認知症施策推進計画の策定に当たっての考え方に関する座談会」におけるご発言からの抜粋です。本座談会の動画も参照ください。

(<https://www.youtube.com/watch?v=Wu1NWmsAhfg>)



一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ 相談役理事  
藤田和子 氏

これまでは「認知症の人」というと、「何もわからなくなった人」「何もできなくなった人」「助けな  
いといけない人」、そんな印象を持たれていたと思います。しかし、今回の基本法では改めて「認知症  
になってからも自分らしく生きていくことができる」社会の実現が求められました。

これからは「自分（都道府県・市町村）たちだけで認知症の人たちに対してどうしたらいいかを考え  
る」ではなく、「住民みんなと認知症になってからも住みやすいまちにしていくためにはどうしたら良  
いか」ということを考えていく必要があります。

これまでの取組を刷新し、新しい認知症観に基づくまちづくりが進められることを願っています。



一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ 副代表理事  
戸上守 氏

「新しい認知症観」という考え方が出てきたということは、「古い認知症観」が未だに残っているとい  
うことです。まだまだ「認知症の人はうまく話せない」「何もできない」と考えている方も多いかもし  
れませんが、是非この基本法の施行をきっかけとして、もっと認知症や認知症の人のことを理解してほ  
しいと思います。

認知症の人は支援される側ではなく、ともに社会をつくる一員であり、認知症の人が活躍するチャンス  
や場がより一層創出されることを期待しています。そして、各都道府県、各市町村において、「私たち  
が住む地域の“新しい認知症観”はこういうものです」と掲げてほしいです。



公益社団法人認知症の人と家族の会 前代表理事  
鎌田松代 氏

認知症の人と家族の会の活動では、認知症の人のお話を実際に聴いていただく機会を設けることがあり  
ます。認知症や認知症の人に対する先入観は多くの人にあるかと思いますが、活動のアンケートや意見  
交換では、「認知症の人がとても上手くお話をされることに驚いた」「今までは認知症とは、何も分か  
らない、できなくなると思っていたが、それが間違いであることに気付いた」といった意見が異口  
同音に挙げられます。これは一つの「新しい認知症観」の実感的理解ではないでしょうか。

新しい認知症観を広めていくには、とにかく認知症の人の話を聴く、一緒に過ごすということが非常  
に重要であると思っています。

## 各地域で広がる 多様な取組事例



# 「にんじん収穫体験」や「はたけサロン」を通じた認知症の人の活躍の場づくり

## 岐阜県各務原市

### 企業や大学生と連携して取り組む農福連携事業

#### 基本情報

人口 (高齢化率)	14.3万人(29.0%) ※住民基本台帳(令和8年1月1日現在)
面積	87.81km <sup>2</sup>
担当部署	高齢介護課、健康づくり推進課

予算

① 本事業の令和7年度予算額	2,924千円
② 本事業の予算の財源	地域支援事業交付金等

#### 取組概要

本取組は、高齢化による担い手の減少が課題となっている「農業」分野の事業所管部署と、高齢者の健康づくりや活躍の場づくりを推進している「高齢者福祉」分野の事業所管部署が連携し、両者の課題を解決することを目的として取り組んでいる。推進にあたっては、農業協同組合（JA）や市内に所在する大学、福祉事業者と連携し、認知症の人やその家族等が楽しみながら参画することをコンセプトとしている。

#### 取組経緯

各務原市では、農政課が主導して部署横断の会議体を設け、名産品「各務原にんじん」のさらなる普及啓発に向けた取組を検討してきた。平成28年から高齢者福祉分野での検討が始まり、高齢者が身体を動かす機会をつくる「にんじん収穫体験」（年1回）を開始した。また、平成29年には東海学院大学が主体となって「各務原にんじんフレイル予防体操」を考案し、認知症カフェ等で展開し始めた。さらに、平成31年からは、認知症の人だけではなく、さまざまな市民の交流の場として「はたけサロン」を開始した。



#### 取組詳細

農福連携事業を通して、認知症の人を含めた高齢者が農業分野で自信や生きがいを持ちながら活動を行うことで、参加者や農業協同組合（JA）、大学生、行政職員等の運営者にとっても、「認知症になってからも社会の中で活躍していける」ことを理解する機会となっている。



収穫の様子

##### <にんじん収穫体験>

各務原市では二期作でにんじんを耕作しており、11月～12月の収穫時期に「にんじん収穫体験」を開催している。参加対象者は、認知症の人や家族で、令和7年度には合計55名が参加した。

収穫体験当日には、東海学院大学の先生によるセミナーや、同大学からのキッチンカーの出店も行われており、多世代が交流する場ともなっている。



東海学院大学の学生たちも参加

##### <各務原にんじんフレイル予防体操>

東海学院大学が考案した「各務原にんじんフレイル予防体操」は、医療栄養学科の学生たちによる食育活動の一環として、認知症カフェや市内の高齢者施設、小学校などで取り組まれており、認知症の人と学生などが交流する機会となっている。

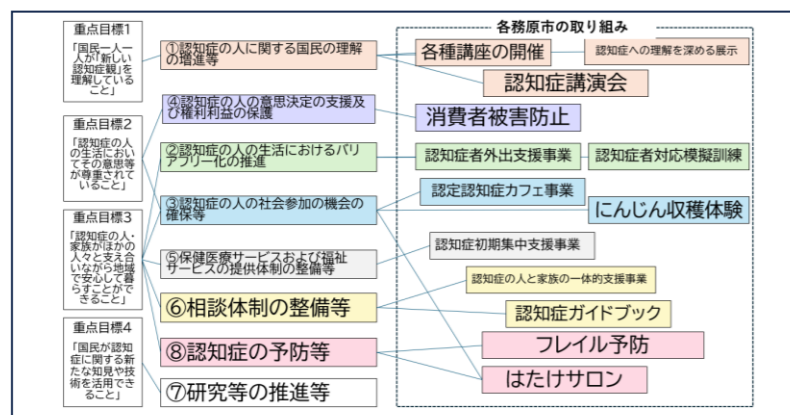
##### <はたけサロン>

毎週日曜日の朝8時から1時間程度、市内の畑に集まって農作業し、その後は茶話会を開いている。時節によって、収穫した野菜を調理した食事会を開くこともある。

参加対象者は、市内在住の65歳以上の高齢者であり、毎回15名～20名程度が参加する。中には認知症の人やその家族も参加している。認知症の人だからといって常に誰かが手助けするのではなく、参加者は各自のペースで互いに教え合いながら楽しんで参加している。

#### 行政の役割

高齢介護課が主体となり、農業協同組合（JA）や東海学院大学と連携して「にんじん収穫体験」を開催している。また、健康づくり推進課が一般介護予防事業として「はたけサロン」（委託先：有限会社あい）を実施している。



各務原市の認知症関連事業の全体像

#### 取組の成果、今後の展望・課題

##### 成果

・認知症の人とともに農作業することを通して、家族や同世代の参加者、学生、行政職員、企業の担当者等と一緒に取り組むメンバーは、「認知症になってからも活躍できるんだ」「楽しいことがあるんだ」という認識を持てるようになった。

##### 展望

・はたけサロンの取組では、参加者が限定的であることが課題となっている。今後、より多くの市民に知ってもらい、なかなか外出機会のない認知症の人やその家族などさまざまな立場の人が参加できる仕掛けづくりを進めたい。

## にんじん収穫体験

平成28年～

### にんじん収穫体験イベントの開催

各務原にんじんPRを兼ねて、にんじん収穫体験を定期イベントとして開始した。



にんじん収穫体験

認知症の人に対して、にんじん収穫の補助が必要と思っていましたが、認知症の人がどなたかも分からないほど、参加者の皆さんが元気に収穫をしていたため、家庭菜園などに興味を持っていただけたらと思います。



農政関係部署の職員

## にんじん体操

平成29年～

### にんじん体操を含めた講座の実施

東海学院大学が地域の認知症カフェを訪問し、にんじんに含まれる栄養や食べ方の話をした後、「各務原にんじん」になりきってにんじん体操を実施した。



にんじん体操の展開

「各務原にんじん」の鮮やかなオレンジ色に負けない皆さんの笑顔に触れ、この野菜が持つ「人を元気にする力」と、食による地域交流の重要性を深く実感しました。このにんじん愛を糧に、今後も地域福祉に貢献したいです。



学生

## はたけサロン

平成31年～

### 一般介護予防事業「はたけサロン」の開始

65歳以上の高齢者を対象とし、毎週日曜日に野菜の栽培活動を行っている。収穫した野菜は市主催イベント等で販売することもある。



野菜栽培の様子

認知症施策に携わることは初めてだけど、一緒に収穫体験をすることで、認知症になってからも変わらずできることがあると気づいた。



福祉関係部署の職員



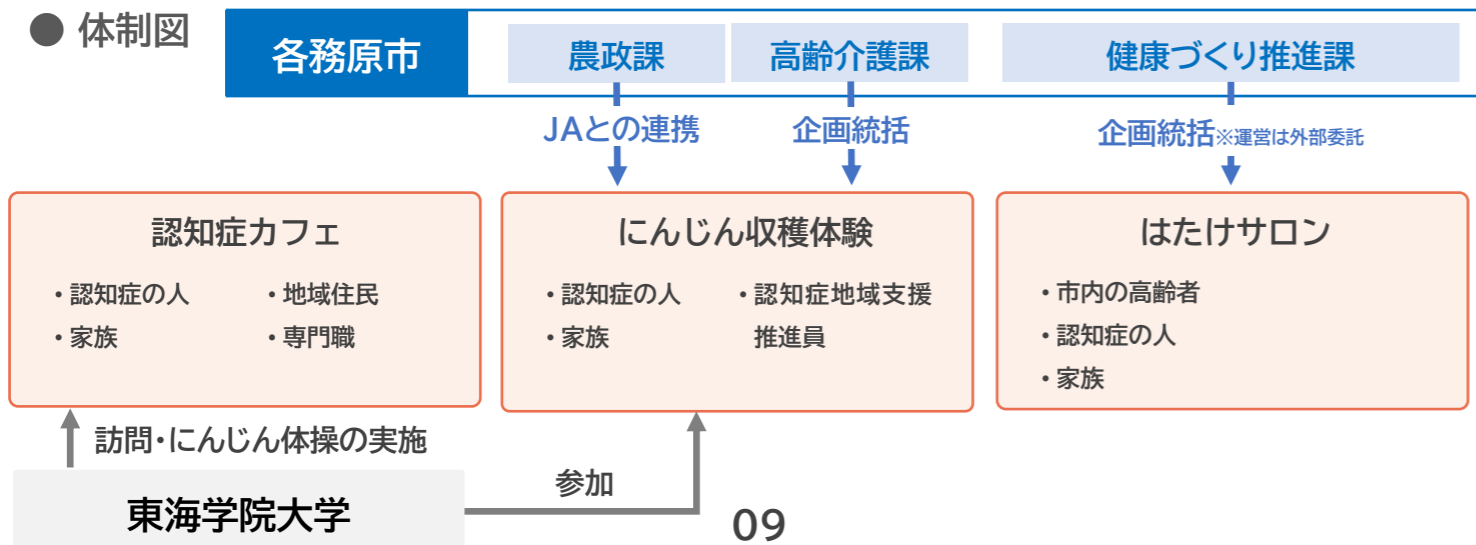
収穫した野菜を販売している様子

認知症カフェを運営する中で、参加者のために“特別なイベント”を企画しないといけないと思っていた。「はたけサロン」では、イベントがない日も、皆さん楽しそうにおしゃべりをして過ごしており、そういう姿を見て、「ああ、気負って企画しなくてもいいんだ」「人が集まる場であれば、それだけでいいんだ」と気づくことができた。



参加した方

### ● 体制図



### 取組に参加した人たちの声

活動に参加することで関わりの輪が広がり、良い気分転換になっている。



認知症の人

家ではあまり会話が弾んでいなかったが、活動に参加することで、楽しみにしている共通の話題ができ、会話が生まれるようになった。



家族

過度に先回りして手伝うのではなく、同じ立場として一緒に取り組むことが大切だと気づいた。



市担当職員



# 熊本県認知症施策・地域ケア推進課の会計年度任用職員として認知症の人が活躍

## 熊本県

### 認知症の人と県庁職員が同じ職場でともに働く

#### 取組概要

熊本県では、認知症の人が住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けるため、認知症施策の一環として社会参加等の取組を行うだけでなく、同じ“職員”という立場で認知症の人が働き、ともに認知症施策を企画・立案・実施している。

#### 取組経緯

熊本県では、第9期介護保険事業支援計画に認知症施策の内容を含めているものの、これまでの計画・施策の検討にあたっては、認知症の人からの意見を十分に聴くことができていなかった。そのため、認知症施策推進計画の策定（第10期介護保険事業支援計画と一体的に策定予定）にあたっては、認知症の人の意見を聴きながら既存の計画・施策を見直したいと考えていた。

認知症施策を担当する職員同士で、「どのように認知症の人の意見を聴くか」、「既存の計画・施策を見直していくか」を検討した際に、認知症の人と同じ職場でともに働くことによって気づきがあるのではないかと考えた。そこで、庁内で検討を行い、会計年度任用職員を募集するに至った。

#### 行政の役割

会計年度任用職員を公募し、書類選考・面接等を行い、任用手続きを行った。なお、事業費は、厚生労働省「認知症施策推進計画に係る策定準備支援事業」を財源としている。



集合写真

#### 基本情報

人口 (高齢化率)	168万人(32.8%) ※住民基本台帳(令和8年1月1日現在)
面積	7,409km <sup>2</sup>
担当部署	健康福祉部 長寿社会局 認知症施策・地域ケア推進課
予算	①本事業の令和7年度予算額:3,406千円 ②本事業の予算の財源:認知症施策推進計画に係る策定準備支援事業

#### 取組詳細

令和7年5月から会計年度任用職員として認知症の人が働き始めた。働き始めて最初の4か月程は、職場環境と仕事自体に慣れてもらうことを重視しつつ、認知症月間（9月）のイベントに向けた準備に注力していた。10月以降、熊本県が任命しているくまもとオレンジ大使と協力しながら、できる限り多くの当事者の不安を解消するために、ピアサポート活動の立上げ支援や本人ミーティングの企画のほか、認知症カフェ等に参加している。

通常は週4日勤務しているが、勤務時間中にずっと座り続けていることが難しい。そのため、1日15分・2回程度、リフレッシュタイムを設けている。リフレッシュタイムは、関係職員との交流の時間として位置付けており、庁内を一緒に散歩したり、話をするすることで、互いの理解を深めている。特定の職員のみが関わるのではなく、管理職を含めた関係職員全員を対象として順番を決め、さまざまな職員とリフレッシュタイムを取るようになっている。



講演会に参加している姿

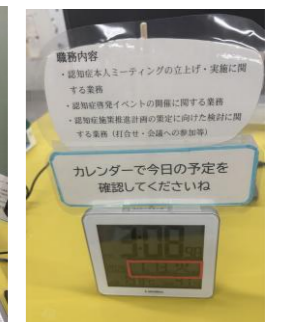


リフレッシュタイム中に撮ってくれた写真

働き始めた当初は、どのようにすれば互いに心地よく働けるのが不安があった。家族やケアマネジャーにも相談し、なるべく職場と本人の家の環境の変化がないよう心がけた。また、本人に変化があったときや大きなイベントの実施前後、今後の取組事項を考えると等には、本人や職員が参加する振り返り会を実施し、話し合いながら業務内容を決めている。



業務机の様子



普段使っている時計

#### 取組の成果、今後の展望・課題

##### 展望

- ・会計年度任用職員として働く認知症の人がいることをきっかけとし、これまで取り組まれてきた本人ミーティングや認知症カフェ等の活動が少しずつ幅を広げている。今後、より多様な活動につながることを期待している。

## 一緒に働き始める前

令和7年3月

### 会計年度任用職員の公募

認知症施策の推進にあたり、認知症の人の声を生かした施策とすべく、同じ立場で施策を進める方を募集することに。

認知症施策を担当しているから「新しい認知症観」という言葉自体は理解している。



県職員

## 一緒に働き始めてから

令和7年5月～



日頃の業務風景

一緒に働き始めて、ようやく「認知症になってからも何もできなくなるわけではない」と実感した。

本人ミーティングの話題探しや本人の考え等を職員が理解するために新聞スクラップを始めた。最初は記事を選ぶのが難しいこともあったが、今では興味のある記事を選び、職員との対話や記事の写真撮影など、できることが増えた。

決まった手順やその人にあった定型があれば、新しいことも学んでいけると分かった。



県職員

## ● 実際の勤務の様子



認知症月間イベントでの本人ミーティング



新聞スクラップの取組



認知症カフェへの参加



企画した江津湖での本人ミーティング

## ■ 職員

・ 保健師という立場ではあるが、これまで認知症の人と接する機会がなかった。認知症といってもいろいろな症状があり、人それぞれ違う、当事者だからこそできることがある。本人は「認知症と診断されたとき、どんな気持ちでしたか？」と聞かれても、「仕方ないと思った。認知症になってもできることがある」、「料理も続けているし、散歩もしている」と答えており、一緒に働く本人の姿から、工夫すればこれまでの生活や取り組んできたことを続けられると実感している。

だからこそ、認知症の人たちのできること・やりたいことを尊重し、難しいところがあれば「どうやったらできるか」を対話しながら工夫していくことが大事だと気づいた。

・ 県庁では直接住民と話す機会が少なく、なかなか認知症の人と話す機会がなかった。このため、認知症カフェ等に県職員が参加しても、あくまで仕事目的で参加しているんだろうと捉えられてしまう。同じ職場にいる本人と一緒に活動をすることで、円滑に参加することができ、外に出て認知症の人たちから話を聴く機会が増えてきた。

## ■ 本人

熊本県庁で働き始める前は、認知症の人たちが集まる場にはあまり顔を出していなかった。本人ミーティングやピアサポート活動、認知症カフェ等において、ほかの当事者の皆さんに「こういうときに、自分はこう工夫しているよ」と直接伝えたい。「当事者だからこそ理解できることがある。最後の奉公をしよう。」と思い、会計年度任用職員に応募した。

職場に持ち込んでいる鞆の中には、名刺入れや、筆箱、財布、鍵等を入れ、内側のポケットにモノの名前を書いたテープを貼っておく等、分かりやすいように工夫している。最近は色々な集まりの場に出向いて話す機会も多いため、趣味の「自作の仏像」の写真も持ち歩いて、周りの人と話しやすいようにしている。

同僚たちは、自分のペースに合わせて待ってくれるから、安心して働くことができる。次から次へ、あれしてください、これしてください、と言われるとパニックになってしまう。業務内容も、短く簡潔に伝えてくれるのも有難い。

認知症になってからも働き続けたいけど一歩踏み出せない方には、「まずは外に行ってみてほしい。家の中にいるより、外に出て、いろんなところに行くとなんかが始まると思う。」

これからも「認知症になってからも色々な事ができるよ。もったいない。」ということを皆さんに伝えていきたい。



普段仕事で持ち歩く鞆（写真左）  
自作の仏像（写真右）



# 「学生たちとソフトボールをしたい！」という声を受けて始まった医学部生と認知症の人との定期戦の開催

## なでしこガーデンデイサービス

### ソフトボールの試合を通じた学生との交流

#### 取組概要

大分市に所在するなでしこガーデンデイサービスでは、認知症の人と学生が直接コミュニケーションをとり、ソフトボールの試合を通して交流することで、学生や周りの人たちの古い認知症観を払拭することを目指している。

#### 取組経緯

なでしこガーデンデイサービスでは、なでしこガーデンデイサービスに通う認知症の人（以下、メンバーという。）からの「ソフトボールをしたい！」という声を受け、令和2年から、大分市の協力を得ながらソフトボールの練習・試合を開始した。

大分県主催の会議体にメンバーが参加した際に、大分大学医学部看護学科の先生から「何をしたい？」と聞かれ、「学生とソフトボールをしたい！」と答え、先生が学生を集めてくれたことをきっかけに交流が開始。



#### 行政の役割

本取組には、特段、行政の役割は設定されていない。ただ、試合当日に応援に駆け付ける職員も多く、認知症の人からの意向により、そのままバッターボックスに立つことも。



交流戦当日の様子

#### 基本情報

場所	大分大学近くの野球場
頻度	年間2回程度
体制	大分大学医学部看護学科老年看護学分野・看護学ゼミ「当事者とともに創る看護」の授業の一貫として開催

#### 取組詳細

大分大学医学部看護学科とのソフトボールの試合（年2回）には、大分県内在住の認知症の人が20名以上参加している。若い頃に野球をしていた方や、未経験者だけでも身体を動かしたいと思う方が参加している。なでしこガーデンデイサービスのメンバー以外にも、大分県ピアサポート活動支援事業の中で知り合った認知症の人が参加している。

大分大学は医学部看護学科の授業の一環として取り組んでおり、①試合前に本人ミーティングに参加して試合ルール等を一緒に検討すること、②試合当日に参加すること、③試合後は振り返りを行い、レポートとして取りまとめること、としている。

ソフトボールの試合といっても、認知症の人だからといって手を抜くのではなく、楽しく真剣勝負をするためのルールを学生と認知症の人が一緒に考えている。令和7年度のルールは以下のとおり。



#### ルール

- Young yearsのメンバーは守備のときに全員参加できる（参加者が20人の場合、ピッチャー・キャッチャーに加えて、内野が8人、外野が10人となる）。
- 学生たちが攻撃のときには、3塁とホームの間にお茶を飲むテーブルを置き、小話をする必要がある。認知症の人がその小話を「面白い！」と判断したら進塁して良い。
- 2回裏終了後、各チームの選手をトレードする。

#### 取組の成果、今後の展望・課題

##### 成果

授業で医療モデルを学び、病院の患者等としか接する機会のない学生たちが、ソフトボールの試合を通して、元気で楽しく過ごしている認知症の人と交流することで、大きな意識変容が生まれている。また、認知症の人にとっても、身体を動かす機会になるだけでなく、日々のモチベーションの向上につながっている。

##### 展望

現在、大分県内の多くの市町村等から「なでしこガーデンデイサービスYoung yearsのメンバーとして参画したい」という打診をもらっている。今後は、県内の各地域でチームが組成され、対戦相手として交流していけると良いと考えている。

準備

学生たちが  
本人ミーティングに参加

本人ミーティング(月1回)に学生たちが参加し、認知症の人とともに真剣にソフトボール勝負をするための新しいルールを考える。



本人ミーティングの様子



認知症の人



学生

学生によるレポート

なでしこの職員の対応を観察すると、若年性認知症の人を特別扱いすることなく、地域で暮らす一員として自然に関わっている姿が印象的だった。支援する側とされる側という関係性ではなく、ともに生活を営む仲間として接する態度を学ぶことができた。

試合当日

交流戦の開催

本人ミーティングで決めたルールにのっとり、交流戦を実施している。当日は、なでしこガーデンデイサービスのメンバーや学生以外に、大分県・大分市等の行政職員や近隣の老人ホームの方が応援に来てくれることもある。



交流戦の様子



行政



市民



認知症の人



専門職



先生



学生

今回の交流戦を通して、改めて「認知症って何だろう」と自分の中で整理する時間になった。祖母も認知症で、できることもあれば忘れてしまうことや時間がかかることもある。しかし、それは認知症に限らず誰にでも起こることであり、その一部分だけを切り取って「できない人」としてしまいう捉え方には、ずっと違和感があった。今回の交流戦では、その思いをさらに強くした。これからも、認知症を「病気」ではなく「その人の人生のひとつの段階」として捉えたい。

後日

学生たちがMVPを選出・  
レポートを作成

再度学生たちが本人ミーティングに参加し、試合当日の様子を振り返るほか、学生たちが選んだMVPを発表する。また、後日報告レポートを作成し、参加者にフィードバックしている。



本人ミーティングの様子



認知症の人



学生

大切なことは認知症の有無ではなく、その人を見ることだと気づくことができた。その人の意思には、その人がこれまで歩んできた人生の中で作り上げたアイデンティティや認知症になってからの経験が深く関係している。看護専門職として専門性を出すべき場面はあるが、最初は人として出会い、その人を知り、ともに何をしていきたいのかを考えていくことが、認知症の人の視点に立つということだと思った。

取組に参加した人たちの声

学生たちからはエネルギーをもらっています！ソフトボールの試合をすることはとても楽しくて、なでしこガーデンに集まるみんなの元気の源になっています。



認知症の人

活動するにあたって、認知症の人がそれぞれ連絡を取り合って日程調整等をするのは難しい。なでしこガーデンの職員が一括で連絡調整を担ってくれて、試合会場まで連れて行ってくれるから、安心して参加できます！



認知症の人

認知症の人が試合するということでハンディもあるが、認知症の人が相手だから手を抜くのではなく、学生たちと新しいルールを考えて真剣勝負をすることで面白さも倍増する。



専門職

● 体制図

ソフトボールチーム  
「Young years」



専門職



認知症の人

当日参加・応援

大分大学医学部  
ソフトボールチーム



大分大学医学部看護学科

準備・会場手配等

- ・ 大分県の職員
- ・ 若年性認知症支援コーディネーター

- ・ 認知症地域支援推進員
- ・ 医療機関の職員

- ・ 近隣老人ホームの利用者



# 課題より可能性、ささやかな幸せと知恵を見つめあうことから出会い直し、地域づくりへ

## 一般社団法人 人とまちづくり研究所

# 奈良県天川村等での「可能性指向」の推進

### 取組概要

認知症の人が大事にしていること、ちょっとした楽しみやこだわり、知恵に着目して、認知症の人と出会い直し、豊かなかかわりと本人とともにするアクションを生み出すことを目的とする研修と伴走支援、小さな幸せのデータベースの構築等に取り組む。

各地で、地域の实情にあわせて専門職・自治体職員・認知症サポーター・広く住民や企業が参加する、ワーク中心の実践的な研修を企画、本人の声を聴く・肯定する・一緒にやってみる「可能性指向のアプローチ」により、認知症に関する悲観的な思い込みの軽減、日常のかかわり・支援の見直し、一人ひとりの本人の声を起点とする仲間づくりや居場所づくり等の試みにつながっている。

### 取組経緯

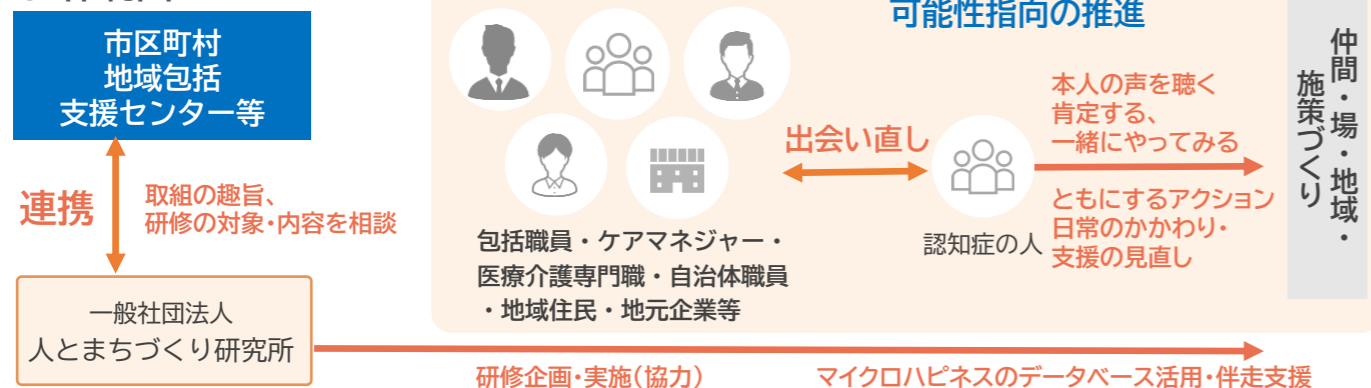
「認知症未来共創ハブ」の認知症の人のインタビューから見てきたことをもとに、三重県名張市の協力を得て可能性指向研修のプログラム開発に着手（令和6年度）。令和7年度までに北海道鹿追町、東京都多摩市、神奈川県横浜市、岐阜県美濃市、福岡県福岡市等で実施。研修を通じた意識変容を行動変容につなげる伴走支援、本人参画の地域づくり、本人の視点からの認知症施策の見直し等を展開している。

こうしたなか、中山間・人口減少地域の奈良県天川村（担当：健康福祉課）では、村全体が課題指向から可能性指向へと転換していくきっかけのひとつとして、まず地域ケア会議に参加する村内及び近隣の専門職に、認知症に関する可能性指向の研修を試行することになった。

### 行政の役割

自治体／地域包括支援センター等は、当該地域での問題意識や取組の趣旨を共有（認知症施策推進計画の策定準備、認知症地域支援・ケア向上、認知症サポーター活動促進・地域づくり推進、在宅医療・介護連携推進、生活支援体制整備等）、入口として可能性指向研修の対象・内容を相談する。参加者の反応を見ながら、その後の可能性指向のアプローチの推進について検討する。

#### ● 体制図



### 基本情報

場所	北海道鹿追町、東京都多摩市、神奈川県横浜市、岐阜県美濃市、三重県名張市、福岡県福岡市等、全国10自治体(令和8年3月時点)。 ※本事例は、令和8年1月27日に奈良県天川村(人口1,171人・高齢化率52.9%・面積175.7km <sup>2</sup> ／令和8年1月末時点)・保健福祉総合センターで開催した可能性指向研修(入門編)を中心に紹介。
財源	人とまちづくり研究所の日本財団助成事業のほか、各自治体の趣旨・位置づけにより、地域支援事業の関連する事業費、認知症施策推進計画に係る策定準備支援事業、都道府県から市区町村への関連する事業費の補助 等

### 取組詳細

暮らしの場で認知症の人とともに過ごしながら継続している「認知症未来共創ハブ」のインタビュー・88人分の文字起こしを分析してみると、最も強く表れていたのは「幸せ」の感情。その背景に、たくさんの幸せのタネと生活の知恵があふれていることが明らかになった。他方、一般の人は認知症の人は強い怖れの感情を抱いて暮らしていると想像しており、「認知症の人と喜びや楽しみを分かち合える」と考えている人は約半数、また、内閣府の「認知症に関する世論調査」（令和7年）で、認知症に対するイメージを尋ねたところ、「認知症になっても、できないことを自ら工夫して補いながら、今まで暮らしてきた地域で、今までどおり自立的に生活できる」と答えた人の割合は3.2%にとどまっている※。

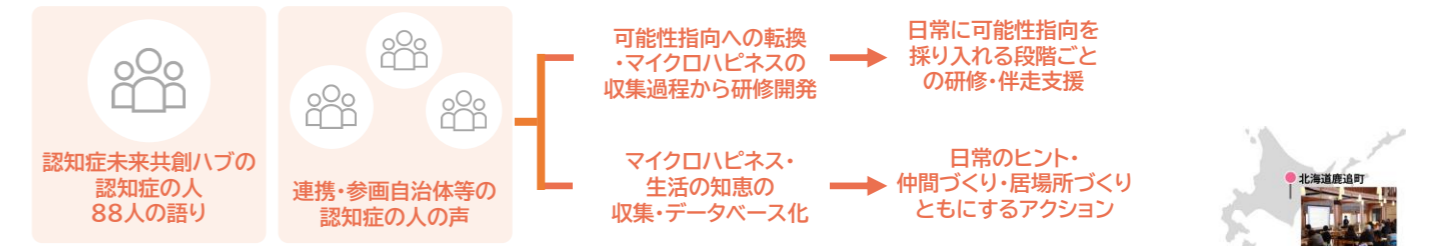
※堀田聡子(2025)「認知症基本法が認知症の人の生活に変化をもたらす契機となるために」『認知症ケア事例ジャーナル』18(2),138-146.

こうした現状をもとに、本人が大事にしていること、ちょっとした楽しみやこだわり、知恵や工夫に着目して、認知症の人とともにより良い環境をつくりだしていくための実践的な研修(可能性指向研修)の開発に着手、連携・参画する自治体等の实情にあわせて企画・実施(協力)している(令和8年3月時点で全国10自治体)。

さらに、研修の参加者が、自分と身の周りの人、認知症の人の「マイクロハピネス」に目を向けることを通じて出会い直し、収集したマイクロハピネスをデータベース化しながら、日常のかかわり・支援の見直し、本人とともにするアクション、施策へと反映していくプロセスにも伴走支援を行う。

可能性指向のかかわり	①本人の声を聴く ②肯定する ③一緒にやってみる
マイクロハピネス	本人らしい日課、本人の気持ちがほころぶこと、本人の小さな幸せ・楽しみ、こだわり(あなたの気持ちが動くこと)
生活の知恵	苦手なことが増えてきても、本人がそれでいいと思えたり、やってみようと思えるように、見方・とらえ方を変える、やり方を変える、周囲の手を借りる等して工夫、実践していること

### <推進のイメージ>

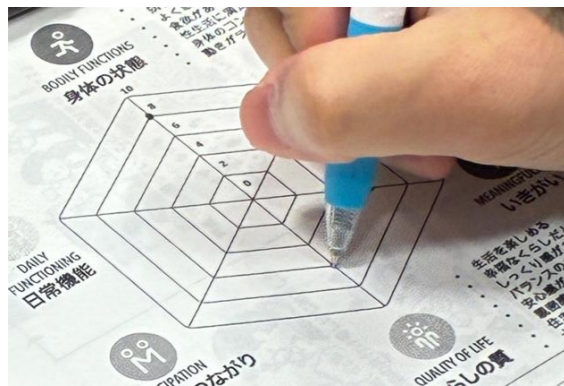


### <奈良県天川村での取組>

健康福祉課5人のうち、保健師2人が概ね村民全体の状況を把握。施策見直しに取り組みたいが、診療所事務局長等複数の兼務もあり、なかなか手がまわらない。そこで、村内・近隣の専門職多職種が集い、生活に近い情報を持ち寄る場にもなっている地域ケア会議で可能性指向研修(入門)を試行することで、新たな視点を共有のうえ、今後の展開を検討することになった。



取組詳細:天川村での可能性指向研修(入門)(令和8年1月)



ワーク① あなたの調子はどう？

本人の声を聴く前に、まず自らの声に耳を傾けます。身体の状態・心の状態・いきがい・暮らしの質・社会とのつながり・日常機能という6つの指標で今の自分の調子を見つめ、隣の人と対話します。



ワーク③ ゆるかわ点検

水平な関係を築くため、他者から共感される／思わず笑ってもらえるところを知りましょう。ポイントは「ゆるさ」と「かわいさ」。自分で書き出したあと、ペア／グループで加えていきます。仕上げは家や職場でぜひ。



ミニレクチャー  
可能性指向とマイクロハピネス

認知症の人88人の語りから見てきたことを、データとエピソードを交えて紹介。可能性指向の考え方やかわり方のポイント、要となるマイクロハピネスについて解説します。



ワーク② 認知症の人との  
コミュニケーションを振り返る

定期診断で認知症の診断を受けたてつおさん、家族や専門職の反応は！？実話に基づく短いアニメを視聴。本人の気持ちは？あなたならどうする？と考え、グループで共有します。



ワーク④ 肯定のコミュニケーション  
Yes, and

いよいよ対話の準備。2人1組ですべて否定される体験・肯定される体験をします。対話の基本は肯定的な姿勢。できそうと思ったら提案もしてみます。



ワーク⑤ わたしの・〇〇さんの  
マイクロハピネス

各地のマイクロハピネスやその収集のコツを披露したうえ、自分と身近な人、認知症の人のささやかな幸せや生活の知恵を思い浮かべながら書き出し、グループで共有します。

取組に参加した人たちの声



三重県名張市  
地域包括支援センター

多職種で学び合い、認知症に対して前向きな雰囲気が生まれました。マイクロハピネスを見つける視点は、支援をやらなければならないことから発見を楽しむものへと変えてくれました。ご本人との関わりだけでなく、行政と事業所の関係にも変化が起きています。

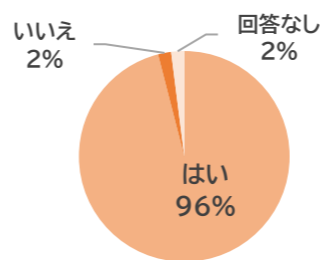


三重県名張市  
ケアマネジャー

自分のプランに欠けていることに気づかされた。  
(ケアプランの) ニーズに本人のしたいことを盛り込んでいきたい。

● 研修アンケートより 三重県名張市のケアマネジャー等120人(令和6年9月)

マイクロハピネスや生活の知恵の収集や共有は、楽しかったですか？



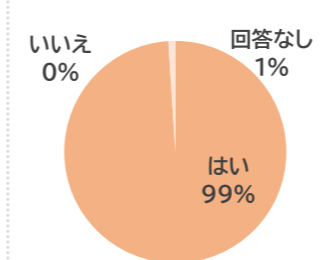
利用者ができることを奪っていたのではないかと、自分を見直すいい機会になった。

奈良県天川村  
ケアマネジャー

まずは隣、前の家のおばあちゃんに「おはようございます！」の挨拶を子どもとしたい。

岐阜県美濃市  
地域住民

集まったマイクロハピネスや生活の知恵を見て、新たな発見や驚きはありましたか？



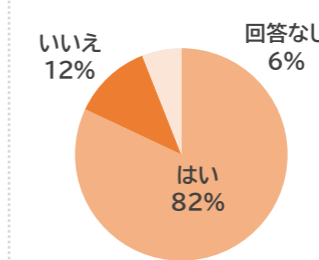
認知症のあるなしに関係なく、相手のことを肯定できる大切さを改めて感じた。

奈良県天川村  
看護師

いろんな人と地域をめぐってマイクロハピネスを集めたい。

北海道池田町  
高校生

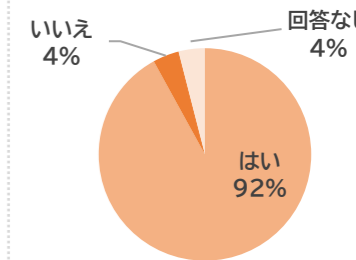
集まったマイクロハピネスや生活の知恵を見て、担当する利用者等のこれまで見過ごしていたエピソードが思い浮かびましたか？



ちょっとしたこだわりは、自分らしさにつながっていたことに気づきました。そのこだわりを大切にしたり、尊重することが住みやすい地域への第一歩だと思います。

北海道鹿追町  
地域住民

担当する利用者等の支援に役立てられるヒントやアイデアはありましたか？



認知症の人は、悲しみや寂しさを多く抱えていると思い込んでいたのですが、幸せを感じることを知って、悲観しすぎなくてもいいのかなと思えました。

北海道鹿追町  
地域住民

● 「一緒にやってみる」企画参加者 オレンジパートナーが認知症の人のマイクロハピネスを持ち寄って企画した「秋のお散歩&カフェを楽しむ会」(東京都多摩市/令和7年10月)>



認知症の人

(コースが決まっている日の外出とは異なり)ゆっくり話せて、偶然出会った無料の展示に立ち寄りできてよかった。



オレンジ  
パートナー

ほぼ初対面でも歩きながら話すことで、肌寒い中歩いたらあったまったね…などと言いながら日常のできごとについて、会話が楽しめた。

# 「認知症バリアフリー社会 実現のための手引き」

## 概要

認知症バリアフリーを推進し、認知症の人の社会参加やチャレンジを後押しする機運を社会全体で高めるため、日本認知症官民協議会の認知症バリアフリーワーキンググループでは、「認知症バリアフリー社会実現のための手引き」を策定している。これまでに、金融、住宅、小売、レジャー・生活関連等の12種の手引きを策定した。

令和7年度の飲食店編・家電量販店編の手引きの策定にあたっては、認知症施策推進基本計画の記載を踏まえ、認知機能の障害という障害の特性によって生ずる当該業種におけるバリアを認知症の人と家族等とともに丁寧に探究するため、「認知症の人が利用しやすい店舗を社員とともに考えるワークショップ」を開催した。



出所) 日本認知症官民協議会HP

## 認知症の人にも利用しやすい“飲食店”を社員とともに考えるワークショップの開催

認知症の人が利用しやすい飲食店を社員とともに考えるワークショップは、認知症の人が実際に飲食店を利用する中で感じているバリア（障壁）を明らかにすることを目的に開催しました。

飲食店における認知症バリアフリーを実現するためには、まず認知症の人が飲食店を利用する際にどんなバリア（障壁）を感じているのかを知り、その上で店舗を利用しやすくするためにどんな工夫ができるのか、認知症の人と企業がともに考えていくことが重要です。ワークショップを通じて認知症の人と企業が直接対話することで、双方のできること・できないことを理解し合いながら、バリア（障壁）の解消に向けた取組を進めていくことができるようになります。ぜひ皆様の地域・店舗においても、その地域に住む認知症の人とともにバリア（障壁）を確認し、解消につなげていきましょう。



出所) 日本認知症官民協議会 認知症バリアフリーワーキンググループ「認知症バリアフリー社会実現のための手引き【飲食店編】」





# 企業とともに、認知症の人の思いを形づくる取組

## 神奈川県

# 認知症ご本人とつながろう！かながわオレンジ大使との交流会

### 基本情報

人口 (高齢化率)	920万人(26%) ※住民基本台帳(令和8年1月1日現在)
面積	2,416.55km <sup>2</sup>
体制	高齢福祉課 高齢福祉グループ
予算	①本事業の令和7年度予算額:2,720千円 ②本事業の予算の財源:一般財源、介護保険事業費補助金

### 取組概要

神奈川県では、令和3年4月に「かながわオレンジ大使」(認知症本人大使)(以下、かながわオレンジ大使という。)を創設した。かながわオレンジ大使は、研修や講演会等への登壇、広報映像への出演等を通して、当事者目線での発信に注力している。

「認知症ご本人とつながろう！かながわオレンジ大使との交流会」は、かながわオレンジ大使の活動の一環として取り組んでおり、かながわオレンジ大使と参加した企業の担当者等が直接対話し、交流することによって、県・企業が連携しながら、認知症の人の思いを形にしていこうと目指している。

### 取組経緯

かながわオレンジ大使が集まり、日頃の思いを語っていたとき、「野球を観戦しに行きたい」という声があった。その声を受け、県職員や支援者等が協力し、実際にかながわオレンジ大使との野球観戦が実現した。

また、県職員がかながわオレンジ大使の通うデイサービスに足を運び、やりたいことに取組ながら楽しんで暮らす認知症の人と継続的に交流してきた。

そういった経験を通して、県としても、改めて「認知症の人の思いを形にしていこう」ということが重要だと考え始めた。同時に、関わりのあった企業担当者から「日頃は認知症の人と関わる機会がなく、ぜひかながわオレンジ大使の話を知りたい」という要望があったことから、交流会を開催することとした。

### 取組詳細

第1回「認知症ご本人とつながろう！かながわオレンジ大使との交流会」(以下、交流会という。)(令和5年9月30日開催)には、かながわオレンジ大使5名と企業の担当者10名が参加した。

交流会自体の目的や今後の取組内容を参加者同士で議論しながら決めていきたいと考え、「認知症になってからもできること、分かることも多く、ありのままの自分をオープンにしながら地域で活動することができる“新時代”」に向けて、かながわオレンジ大使とどのような取組ができるか、話し合いを行った。

その後、再度、かながわオレンジ大使や企業の担当者等が集まり、交流会への期待を挙げ、認知症の人や企業等が参加するメリットを以下のように整理した。

認知症の人にとっては、ほかの認知症の人とつながれる場である。企業等の担当者にとっては、認知症の人の声を直接聴くことができ、製品開発のアイデアやユーザビリティの確認ができ、他企業等とのつながりができる場である。

この交流会を通して、認知症の人の思いを企業とともに形づくり、ひいては交流会自体が共生社会の実現に向けたプラットフォームとなることを目指し、その第一歩として「本人の声を聴き、考える」をテーマとすることとした。

第2回以降は、「本人の声を聴き、考える」というテーマのもとで、認知症の人と企業の担当者等が5~6名のグループとなり、互いに日頃の活動の紹介をするほか、企業の製品に関する意見交換等を行っている。また、第4回(令和7年3月18日開催)には、県立高校の学生も参加し、認知症の人と共創したすくろく開発に取り組んだ。(詳細はP.33コラム参照)

交流会では、認知症の人の日頃の率直な思いを聴くため、参加者に対して①違いを楽しむこと、②否定をしないこと、③前向きな語り合いをすること、の3つをルールとして案内し、良い関係性づくりを心がけている。



交流会の様子

### 行政の役割

高齢福祉課が「かながわオレンジ大使」(認知症本人大使)事業を運営している。  
※交流会の企画・当日運営・かながわオレンジ大使との日程調整等は、NPO法人シニアライフセラピー研究所に委託している。  
※企業に向けた周知等は、いのち・未来戦略本部室(未病産業の創出・企業との包括的な連携・協力の推進等を所管)と連携して実施している。  
本取組は、県の一般財源と介護保険事業費補助金を財源としている。

### 取組の成果、今後の展望・課題

- |    |  |
|----|--|
| 成果 | ・令和5年度に開始して以降、認知症の人や家族、企業、学生など延べ150名以上の方が参加した。                             |
| 展望 | ・これまでは認知症の人と企業のつながりをつくり、交流することに注力してきたが、今後は具体的な製品・サービスの開発にも取り組んでいきたいと考えている。 |

## 企画・準備

### 認知症の人が働くデイサービスに 県職員が訪問・交流

県の職員が、かながわオレンジ大使の通うデイサービスに何度も足を運んだ。交流する中で、認知症の人の声を聴いて、形にしていって重要性を理解し、交流会の企画を開始した。



かながわオレンジ大使が通うデイサービス

着任直後は、認知症の人と接する方法も分からず、「どうすればいいだろう」と思っていた。

デイサービスに何度も足を運び、そこで過ごす認知症の人と関わることで、認知症になってからも自由な空間で楽しく生活できることを実感的に理解できた。また、認知症に対する暗いイメージが払拭された。



県職員

## 交流会

令和5年9月  
第1回交流会



かながわオレンジ大使と企業参加者が同じテーブルに着いて交流



かながわオレンジ大使



企業参加者

令和5年11月  
振り返り会



第1回開催後、かながわオレンジ大使・企業参加者・県職員が集い、今後の交流会の企画内容について検討

令和6年3月  
第2回交流会



同年1月に準備会を行う。第2回交流会以降、かながわオレンジ大使と参加企業が製品に関する意見交換を実施

令和6年11月  
第3回交流会  
令和7年3月  
第4回交流会  
令和7年11月  
第5回交流会

交流会を  
継続して実施

### 交流会に参加した人たちの声



企業

(製品に関して) 社内で検討しているだけでは出てこなかった視点がもられた。



学生

当事者に対する周りからの目線や、偏見があることは変わっていくべきだと思う。残りの1年で、高校生の視点からできることに取り組んでいきたい。



企業

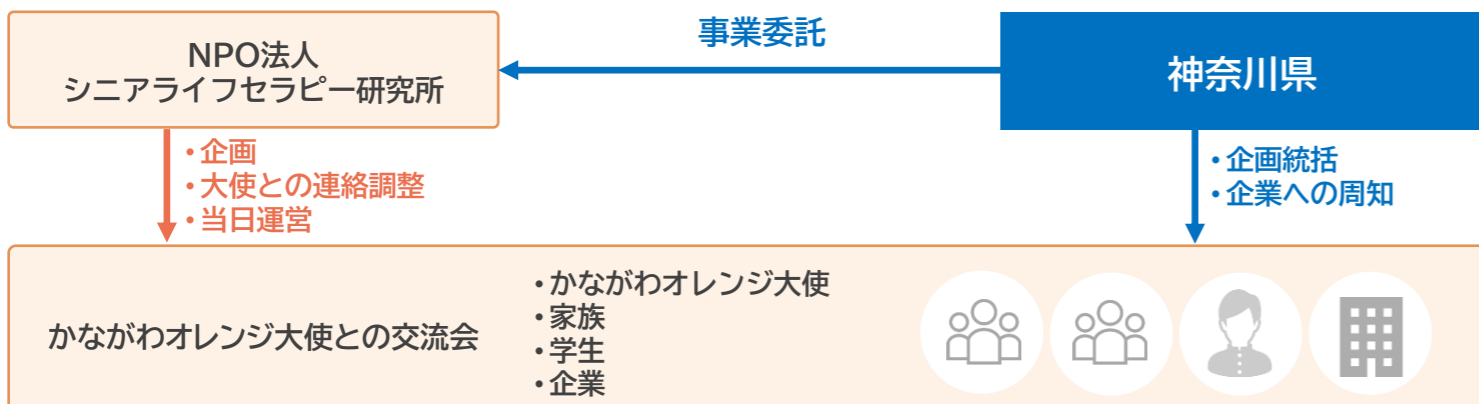
認知症の人が明るく話しているのが印象的で、前向きな思いになった。  
世の中のスティグマを無くしていけるような社会づくりに貢献していきたい。



家族

普段は一人で日中を過ごすことが多く、社会との結びつきを感じられていない姿を家族として見てきたため、このような企業の方々とつながれるコミュニティはとても貴重だと感じた。

### ● 体制図



### メッセージ

#### ■ 運営者

「新しい認知症観」と言うが、認知症だけに注目するのではなく、ほかの障害等を含めて「今の社会がやさしくない」ことをクローズアップしていくべきではないか。

そのためには、福祉に全く関心のない層の巻き込みも重要であり、企業との取組も有用である。福祉に興味がない人たちが自然とその場に集まるような環境づくりや仕掛けを考え、実行していきたい。



# 「支援」から「活躍」へ、まち全体の認知症観を更新

## 福岡県福岡市

### 認知症フレンドリーシティ・プロジェクト

#### 取組概要

福岡市の認知症フレンドリーシティ・プロジェクトは、認知症になっても住み慣れた地域で安心して自分らしく暮らし続けられるまちを目指す取組である。

プロジェクトの根底には、認知症の人を「支援が必要な人」として捉えるのではなく、認知症の人の意思や力、経験を起点に、地域や企業の中で役割を持ち、社会参加し、活躍できる環境を整えるという新しい認知症観が置かれている。福岡市は、この認知症観を行政施策として掲げるだけでなく、当事者参画の仕組みや企業・地域との共創、若年層への教育的アプローチ、環境整備（デザイン）を組み合わせることで、関係者の見方や行動が変わる状態をまち全体でつくろうとしている。

#### 取組経緯

福岡市は平成30年から、医療・介護の枠に捉われない形で、買い物や移動、働くこと等、生活場面の困りごとをまち全体で解決する方向へ踏み出している。単なる支援拡充では共生の実感が広がりにくいとの問題意識から、当事者視点を取り込みつつ、企業・地域・学校が各現場で行動を変えることを重視し、重層的に施策を展開し、連携の幅を広げ拡張してきた。

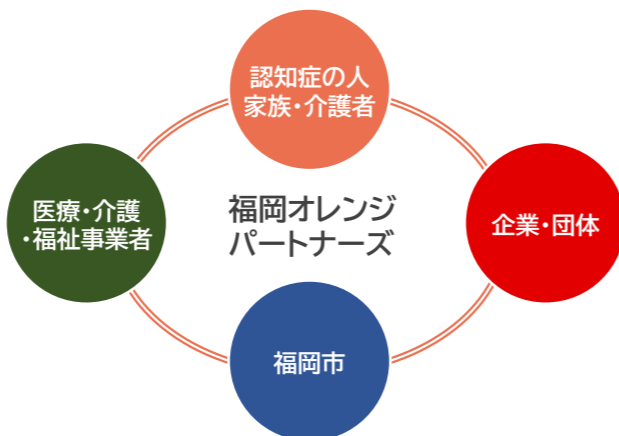
認知症の人が継続的に参画し社会と相互に関わる仕組みとして、認知症の人のみが参加できる「オレンジ人材バンク」を設立し、商品開発への参画や就労など、認知症の人が社会の中で役割を担い活躍できる機会づくりへ挑戦している。

あわせて、企業や団体、専門職等がともに学び、つながり、具体の活動につなげるための共創の場として、オレンジパートナーズの取組を進め、関係者の認知症観そのもののアップデートを図っている。

#### 行政の役割

市は、認知症フレンドリーなまちというビジョンを示し、認知症の人を「支援が必要な人」から「ともに社会をつくる主体」へ捉え直す認知症観を発信している。

企業・団体の学びとネットワーク形成の場を設計するとともに、オレンジ人材バンク等を通じて当事者参画の導線を整え、開発活動への参画や就労機会へつなげている。知識の伝達に留めず、体験や関わり方の学びを通じて行動変容を促す点が特徴である。



#### 基本情報

人口 (高齢化率)	167万人(22.4%) ※住民基本台帳(令和8年1月現在)
面積	343.47km <sup>2</sup>
担当部署	福祉局ユマニチュード推進部

#### 取組詳細

##### <福岡市オレンジパートナーズ>

企業・団体が認知症理解を深めるだけでなく、認知症の人にやさしい商品・サービスの開発や、認知症の人が活躍できる場づくりへ踏み出すための共創プラットフォームである。参加者の現場(接遇・設計・職場等)での改善を促し、認知症観が「対応すべきリスク」から「ともにつくる顧客・生活者・働き手」へ転じている。

##### <オレンジ人材バンク>

認知症の人が企業等と双方向で関わる仕組みとして設立され、モニター参加、提案、講演、就労など複数のフレームワークを用意している。当事者を支援対象に固定せず、役割や社会参加を生む社会デザインとして、新しい認知症観の実装を支えている。

##### <若年層・地域向けユマニチュード講座>

地域リーダー等による講座を通じ、知識よりも「関わり方」を学ぶ機会を提供している。日常の声かけ・見守り行動へつなげ、認知症を「怖い・分からない」から「工夫して関われる」へ更新する効果を狙う。

##### <学校向け講座・教材>

授業枠に合わせた講座や動画教材等を用意し、申込から実施までの手順も示して導入しやすくしている。学びが家庭・地域へ波及しやすく、地域の認知症観を底上げする。

##### <認知症の人にもやさしいデザイン>

環境の理解しやすさを高め、認知症の人の力を引き出すデザインの考え方を発信している。認知症を本人の問題に閉じず、環境の工夫で参加を支えられるという認知症観を広げる。

#### 取組の成果、今後の展望・課題

##### 成果 認知症観の更新が、現場の行動変化として表れ始めている

- ・本プロジェクトの成果は、参加者数の増加のような量的拡大だけでなく、関係者の認知症観が行動の変化として表れ始めている点にある。福岡オレンジパートナーズ等を通じて、企業・団体が認知症を「特別な誰かの話」ではなく、自社の顧客体験、商品設計、職場づくり、地域での役割と結びつけて捉え直し、改善や共創のテーマとして扱う土台が育まれつつある。
- ・また、オレンジ人材バンクによって多様な当事者参画の形が実現し、認知症の人の希望や状態に応じて関わり方を選べる発想が広がっている。企業側も当事者の声を聞くことを「配慮」ではなく「価値創出のプロセス」として位置付けやすくなり、当事者の見方が支援対象から共創のパートナーへと変わる契機になっている。
- ・さらに若年層向け講座・教材は、授業枠に組み込みやすい形で用意され、学びが家庭へ持ち帰られ、子どもだけではなく、親世代の認知症観の変化にもつながっている。

対話

プロジェクト開始

認知症になっても暮らし続けられる都市像の提示と、企業・団体や市民等の参画を促す取組の開始。



関係者同士が「知る」「考える」「つながる」「行動する」場

当事者の「活躍」をつくる  
(オレンジ人材バンク)

当事者の参画機会の登録・調整と、企業等とのマッチングによる活躍機会の創出。



連携

当事者参画と企業連携の仕組み化  
(福岡オレンジパートナーズ)

当事者・企業・専門職の継続的な学び合いと共創を支える参画・対話基盤の整備。



認知症の人と企業の共創

多様な取組の推進

若年層・地域向け  
ユマニチュード講座

認知症の人の尊厳を守る関わり方を学ぶ講座の実施と、市民への理解・実践の普及。



学校でのユマニチュード講座



人材バンク等で活躍している認知症の人

仕事の話もらったときは驚いたが、「今の私にできることがあるなら何でもしてみたい」と思いました。教わりながらできることが増えるのが本当に嬉しい。

視野が広がり忘れかけていたものがたくさん蘇ってきます。一人でも多く機会が増えてほしいです。

取組に参加した人たちの声



取組の支援者

伴走する中で、自分が勝手に描いていた「枠組み」を崩す必要を痛感しました。『認知症だからできない』ではなく、当事者が何を望むかを中心に、どうすれば役割を担えるかを一緒に考える姿勢が大切だと学びました。支援ではなく、可能性を開く関わりをしていきたいです。

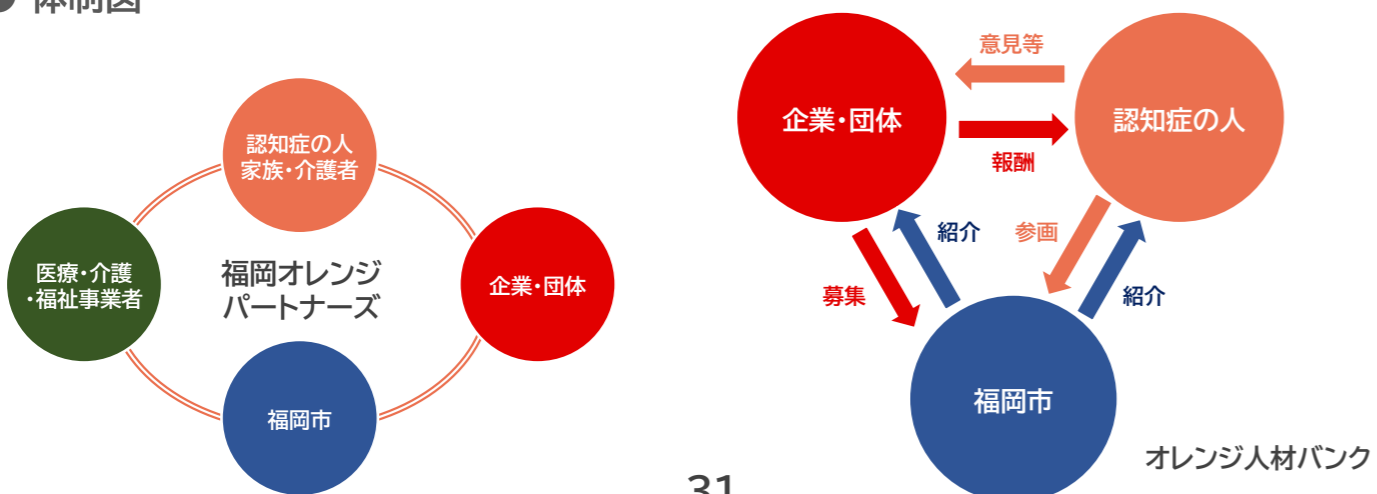


講座を受講した市民

父が認知症になる前は「進行して記憶もその人らしさも失われる」と思い込み、強い恐怖がありました。しかし、取組に触れるうちに自分のイメージが古かったと知りました。認知症を前向きに捉え直し、家族として向き合えるようになりました。

講座を受けて、認知症の人は『困らせている人』ではなく『困っている人』だと腑に落ちました。接し方のポイントが分かり、家族への接し方も見直したいと思えました。正しい情報が広がれば、むやみに怖がらずに済むと思います。

● 体制図



メッセージ

■ 自治体職員(福岡市職員)

企業の方には、『単なるサポートという認識ではなく、人口の1割が認知症という状態になることを考えると、企業が認知症のことを理解し、認知症に有益なサービスや商品を提供することがビジネスとしても非常に有益だ』とお話しています。

# 高校生と認知症の人が開発 「認知症にやさしい社会へむけた ポジティブすごろく」

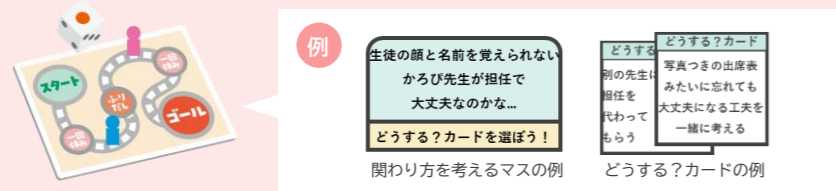
## 特徴・コンセプト

「認知症にやさしい社会へむけたポジティブすごろく」は神奈川県立横須賀高校とNTT人間情報研究所が連携し、探究型授業の一環として小学生などの若い世代へ認知症の理解を広げることを目的に開発した製品である。

### 製品の特徴

#### ① 認知症の人を尊重する関わり方がゲームの要

認知症の人の能力や希望を尊重する関わり方を選択できたほどポイントが高くなる仕組みを通じて関わり方を学び、考えられる(下図参照)



#### ② 認知症の人の多様性

複数のテーマが登場することで「認知症の人は十人十色」であることを学べる

- ▶ テーマ…レビー小体型 x 運転、若年性 x 料理、MCI x 仕事 など

#### ③ 認知症の人の前向きな体験談を反映

困りごとだけでなく、成功体験・前向きな視点を知れる

## 開発のプロセス—認知症の人と共創—

高校生が興味を持った課題を起点に、かながわオレンジ大使や地域の認知症の人、支援者と継続的に共創を行った。認知症の人たちとの対話を通じた課題の深掘りをもとにコンセプトや試作品を作成し、さらに意見を頂いて改善を重ねた。高校生が主体となって検討・対話することで、活発な意見交換が行われた。改善した試作品をオレンジカフェにて体験してもらい、公開に向けたさらなる意見を得た。

### 開発を行った高校生の声

当初は当事者が前向きになれるように「当事者のできることを増やす」という当事者に対するアプローチを検討していたが、対話をかさねることで、当事者を取り巻く社会を変えるアプローチが重要であると気づきました。

高校生と認知症の人との対話の様子  
(上:課題の深掘り、下:試作品評価)



引用:知って、伝えて、支え合う。みんなの認知症(神奈川県)



# 福岡市認知症フレンドリーセンター

## 認知症フレンドリーな取組や最新の知見を発信していく日本初の施設

福岡市認知症フレンドリーセンターは、認知症フレンドリーシティの取組を“見える形”で集約し、市民・企業・専門職が同じ場で学び、関わり、次の一歩につなげる拠点として令和5年9月に開設された施設である。

相談や交流に加え、講座や体験コンテンツ、展示・イベントを通じて、認知症を「知識」ではなく「自分ごと」として理解できる導線を整えている点が特徴である。加えて、センターの空間自体が「認知症の人にもやさしいデザイン」を採用しており、サインの見やすさや配置、コントラストなどの工夫を来館者がその場で確かめられる。自治体担当者にとっては、啓発や研修を“言葉だけ”で終わらせず、現場で再現可能な形に落とし込むヒントを得られる場である。

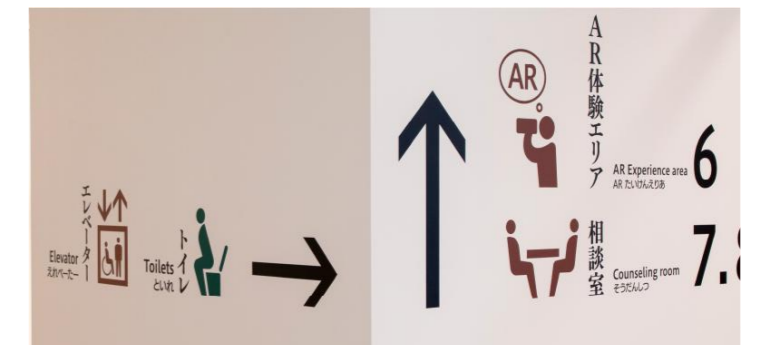


福岡市認知症フレンドリーセンターの様子



## 「認知症の人にもやさしいデザイン」

「認知症の人にもやさしいデザイン」は、認知症の特性を踏まえ、迷い・不安を減らし、誰にとっても分かりやすい環境をつくるための手引きとして整備されてきた取組である。福岡市は手引きの改訂や英語版の発行、公共施設等への導入を進め、他自治体も参照できる工夫が評価され、グッドデザイン賞ベスト100を受賞している。





# 認知症の人と園児と一緒に活動することで生まれた役割と地域のつながり

## 神奈川県相模原市

### 認知症の人の協力のもと保育園行事を実施

#### 取組概要

相模原市では、相模原市立上矢部保育園の行事「お店屋さんごっこ」において、地域密着型サービスBLG相模原と準備段階から協力し、園児と認知症の人が交流する機会を創出した。本取組では、令和7年12月から令和8年1月にかけて、BLG相模原に通所する認知症の人（以下「BLGメンバー」という。）が保育園を訪問し、園児と企画準備や制作活動に参画するとともに、イベント当日もお客さんとして訪問し、園児と交流した。相模原市立上矢部保育園とBLG相模原は同一地域に所在していたものの、これまで継続的な交流の機会はなかった。本取組を契機として、園児とBLGメンバーの間で自然な交流が生まれ、日常的な清掃活動での交流へと発展した。また、保育園職員や市職員にとっても、認知症の人が地域の中で役割を持ち、前向きに生活する姿に触れることで、認知症に対する理解の深化や価値観の変化が見られた。

#### 取組経緯

令和6年度から、相模原市役所とBLG相模原は、相模原市立上矢部保育園の職員が担う業務（園庭の清掃やおもちゃの消毒、砂場の掘り起こし等）の一部を、BLGメンバーが担う仕組みの導入に向けて検討しており、令和7年12月より実際に清掃等の活動を開始した。そのつながりから、保育園行事のお店屋さんごっこを一緒に実施する企画が立ち上がった。

#### 行政の役割

本取組は、相模原市保育課が所管する相模原市立上矢部保育園にて実施した。連携にあたっては、相模原市保育課に所属する相模原市立上矢部保育園の園長が中心となり、BLG相模原との調整及び実施体制の構築を行った。お店屋さんごっこの企画・準備から当日の運営に至るまで、保育課職員も参加し、取組を支援した。また、保育課は、認知症施策を担当する相模原市在宅医療・介護連携支援センターと情報共有を行い、庁内関係部署との連携を図った。イベント当日には、同センターの職員も参加した。

#### 取組内容

相模原市立上矢部保育園では、毎年1月に保育園行事の一環として「お店屋さんごっこ」を実施している。お店屋さんごっこでは、園児が店のテーマを話し合い、品物の制作などの準備を行うとともに、当日は店員役と客役に分かれて品物の売り買いをする。令和7年度は新たな取組として、BLGメンバーに事前準備から協力してもらい、お店屋さんごっこを実施した。



#### 基本情報

人口(高齢化率)	71.4万人(26.9%)※住民基本台帳(令和8年1月1日現在)
面積	328.9km <sup>2</sup>
担当部署	こども・若者未来局 保育課(相模原市立上矢部保育園)、健康福祉局 地域包括ケア推進部 地域包括ケア推進課 在宅医療・介護連携支援センター
予算	なし

#### <清掃活動での連携>

令和6年度から相模原市立上矢部保育園にBLGメンバーが園庭などの清掃の取組について相談を始め、令和7年12月から開始することになった。取組では園庭の掃除や砂場の整備を担っていたが、園児の昼寝の時間と被っており、直接的な交流は生まれなかった。そこで、交流できる機会を持つべく、保育園年間行事「お店屋さんごっこ」にてBLGメンバーも参加する運びとなった。

#### <お店屋さんテーマ決め>

令和7年12月9日・12日に、園児同士の企画会議にBLGメンバーが参加し、どのようなお店屋さんを行いたい、話し合いを行った。BLGメンバーを認知症の人としてではなく地域の人として受け入れ、交流の様子が見られた。一方で、まだごちなさもあった。

#### <品物の制作日>

令和8年1月6日・7日・9日は、BLGメンバー協力のもと、お店屋さんごっこで販売する品物の制作を行った。BLGメンバーが園児を見守る様子、無理なく関わっている様子が見られた。

#### <お店屋さんごっこ当日>

令和8年1月30日の当日は、BLGメンバーは店員役の園児にもてなされ、客役として参加した。参加者は、園児・保育園職員、BLGメンバー・職員、相模原市保育課職員、相模原市在宅医療・介護連携支援センター職員、厚生労働省職員、(株)日本総合研究所社員である。園児、BLGメンバー及び保育園職員の間で笑顔や自然な交流が見られた。園児からの感謝の言葉がBLGメンバーの活力となり、地域でのつながりが広がる一日となった。取組後には、BLG相模原で振り返り座談会を行った。当日購入した品物を見ながら振り返ることで、幼少期の思い出や、認知症になっても地域の中で役割を果たすことができることや、子どもたちの役に立ちたいという前向きな思いが共有された。

#### <つりゲーム>



#### <元気になるお医者さん>



#### 取組の成果、今後の展望・課題

##### 成果

・認知症の人と園児が保育園行事を準備から当日まで一緒に作り上げる中で、園児には安心感が育った。BLGメンバーにとっては、園児からの感謝の言葉が大きな励みとなり、地域社会とのつながりを実感する機会となった。また、関係者の認知症に対するイメージが明るく変わった。

##### 課題・展望

・保育園側は、これまで認知症の人と出会う機会がなく、交流の中で認知症といっても一人ひとり異なることを学んだ。今後は、BLGにも足を運んでBLGメンバーのことを深く知るなど、双方向の交流も検討したい。単発の行事に留めず互いの理解を深め、継続的な関わりにつなげていきたい。

準備

令和7年12月9日・12日

テーマ決め



一緒にテーマ決めをする様子

お互いにぎこちない様子ではあったが、子どもたちの出る案に賛同してくれてありがたかった。

子どもたちの元気な姿にエネルギーをもらった。



保育園職員 認知症の人

令和8年1月6日・7日・9日

品物の制作



園児の制作を見守る様子、一緒に作る様子

BLGメンバーが「子どもが頑張っている姿を見て、自分も頑張ろうと思える」と話してくれたことは嬉しかった。

見守るのが私たちの役目なの。



保育園職員 認知症の人

イベント当日

令和8年1月30日

お店屋さんごっこ



園児がBLGメンバーをもてなす様子

子どもたちの表情も柔らかくなり安心して関わる様子が見られ関係が深まっていることを実感した。(職員)

いっぱい来てくれて嬉しかった。楽しかった。(園児)

子どもたちから元気な声で「ありがとうございました！」と言われて、何よりも嬉しかった。



園児 保育園職員 認知症の人

振り返り座談会

令和8年1月30日

振り返り座談会

BLGメンバーで感想を共有し、交流の楽しさと認知症になっても果たせる役割があることを再認識できた。



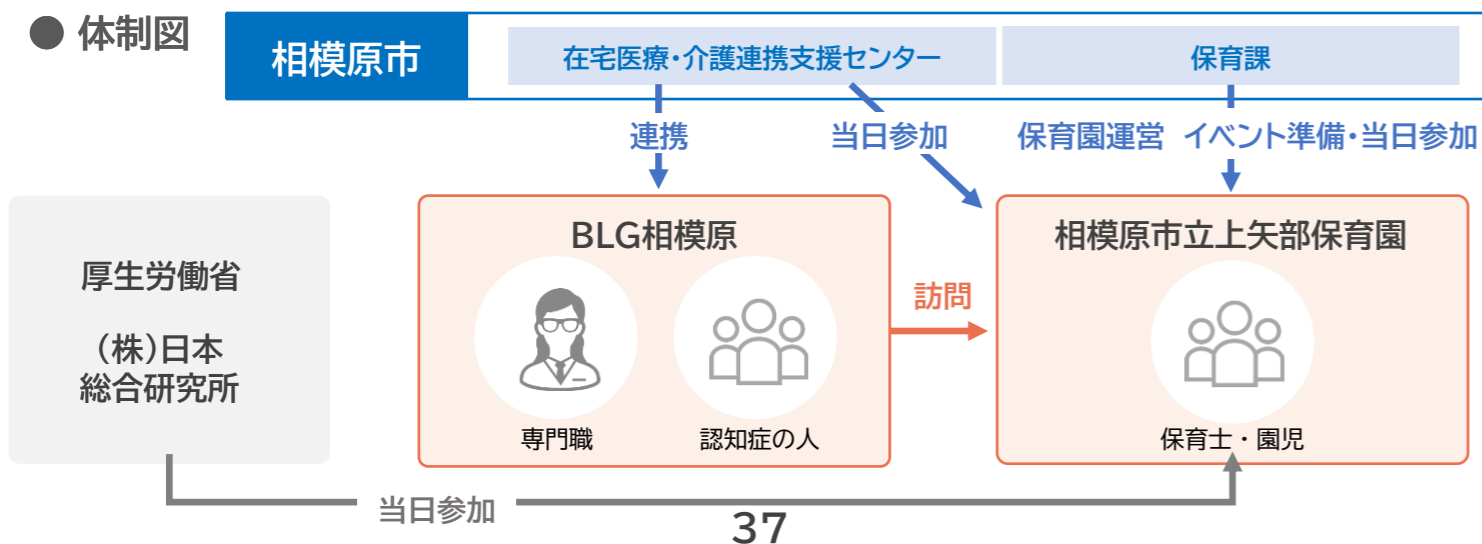
BLG相模原で開催した振り返り座談会の様子

お店屋さんごっこ当日は、園児とメンバーが、店員さんとお客さんという関係性だった。準備段階と同様に、同じ目線での取組ができると、さらに関係性が深まるのではないかと感じた。



専門職 認知症の人

● 体制図



取組に参加した人たちの声

残された時間を若い世代のために、自分たちができることをやりつくしたい。

認知症の人

保育士ではない人から、褒められて交流する経験は、子どもたちにとっても嬉しい経験となる。ぜひ、今後も交流していきたい。また、BLG相模原のもとにも足を運びたい。

園長

メンバーの皆さんの表情を見ると、子どもからのパワーはとても大きい。イベントごとではなくとも、日頃から交流を持てる機会をつくっていきたい。

介護事業所管理者

今回の交流を通して継続的に関わることで子どもたちの安心感が育ち、相手を理解しようとする姿や、言葉で気持ちを伝えようとする姿が育っていくことを改めて感じた。

保育課職員



# 認知症の人と高校生が出会い、共通点を見つけて活動し、振り返り、気づきを地域に広げる活動

NPO法人かしわのもり

## 鹿追高校×れんがの家 実践授業での世代間交流

### 取組概要

鹿追町では、認知症施策推進の一環として、NPO法人かしわのもりと学校が連携し、小学校や高校への出前授業や鹿追高校の家庭科における授業実践を通して、若者世代が地域の認知症の人と自然に関わる機会を創出している。高校の授業では、今年度から家庭科で地域や介護を学ぶために、NPO法人かしわのもりが運営する認知症デイサービス「れんがの家」に高校生が訪問した。高校生と高齢者で好きなおやつをテーマに対話し、お菓子の共通点を見つけて、一緒に買いに行き、一緒に食べ、時間を過ごした。目の前の人と出会うことが、相互の意識を変化させた。

### 取組経緯

平成23年から鹿追高校では、NPO法人かしわのもりと連携し、年間行事として外部講師を招いた「いのちの授業」を開催している。高校3年生は「いのちの最後」をテーマに認知症関連の授業も実施している。その背景があり、若者向けの普及啓発と認知症の人の社会参加の場の創出のため、小学校や高校向け出前講座やれんがの家での家庭科の授業の実践が行われている。

### 行政の役割

本取組は、NPO法人かしわのもりが鹿追町から委託を受けて、鹿追町認知症施策推進事業の一環として実施している。NPO法人かしわのもりは多機能福祉拠点「れんがの家」を運営しており、誰でも使いやすいカフェや認知症対応型通所介護として開設されている。地域に開かれた場所であり、認知症の人と地域がつながる場にもなっている。



集合写真



高校生と畑で使う園芸用ラベルを作成

### 基本情報

場所	れんがの家
日時	令和7年12月5日・9日
体制	NPO法人かしわのもり 連携先:鹿追高校
予算	かしわのもりへの委託費:151万円 鹿追町認知症施策推進事業の一環として実施。当日参加費は、1名につき500円

### 取組詳細

#### <出前授業：小学校や高校向けに認知症の出前講座を開講した。>

鹿追町では、幼小中高一貫教育が掲げられており、地域と関わりのある授業も積極的に取り組まれている。その一環として、今年度は、小学校と高校で認知症に関する出前講座を行った。

特定非営利活動法人イシュープラスデザイン寛様を招き、「認知症世界の歩き方を知り、体験しよう」というテーマで出前授業を開催した。開催後も教員により、振り返りを行うことで、単発の授業ではなく、日常でも認知症について考える機会が育まれた。

鹿追町では多世代住宅なども減っており、高齢者との関わりがない生徒も多い。そのため、「実際におじいちゃん・おばあちゃんに会いたい」という声が出ており、次の段階として、授業の中で高齢者と学生が出会える形での出前講義を検討している。

#### <家庭科の授業：「共通点」を起点に認知症の人×高校生で世代間交流を実施した。>

今年度から新たに鹿追高校で家庭科の授業の一環として、認知症デイサービス「れんがの家」に訪れる活動が始まった。1クラスずつ2日に渡って開催した。

流れとしては、以下のような4ステップを体験した。

- ① 出会う：高校生と認知症の人で、初対面のため自己紹介を行い、共通点を探し、今回は好きなおやつを自己紹介に含め、お菓子の共通点を見つけた。
- ② 買い物をする：町内で買えるお菓子を一緒に買いに行った。
- ③ 食べる：買ったお菓子や果物を切り分けたり、アレンジして、一緒に味わった。
- ④ 振り返る：一連の活動の中で起きたこと・感じたことを振り返った。

これらの成果物を町内の若者に知ってもらうため、授業の内容とそこで起こったエピソードを漫画仕立てにして整理し、小冊子を発行する準備を進めている。

高校生は、相手が認知症の人でも、人生の先輩として尊重して接し、認知症の人は高校生に対して大人としてふるまう。この様子は「普通で自然な出会いから生まれる温かなやりとり」であった。そして、まちで出会ったときに声を掛け合える関係性ができた。

### 取組の成果、今後の展望・課題

- |    |   |
|----|---|
| 成果 | ・高校生は先入観なく出会うことができたため、今後はこの“自然な関係”を生かして、まちで出会えば声を掛け合い、れんがの家に来れば一緒に活動できる年の差のある友達となれる一歩を踏み出した。また、認知症の人も高校生の役に立ちたいという想いが芽生え、社会参加の機会にもつながり、新たな活動を始める可能性が生まれた。 |
| 展望 | ・認知症に関する出前授業は、支援者が学校に赴くのみであった。今後は、実際に認知症の人と接する機会を持ちたい。  |

当日:自己紹介(20分)

令和7年12月5日・9日

認知症の人と高校生の  
共通点を考える

お互いの共通点を見出しやすくするために、今回はおやつをテーマとした。



自己紹介をして、おやつに関するお互いの共通点を探す

だれかと一緒におやつを食べたら  
たのしい、というのが共通点。



専門職

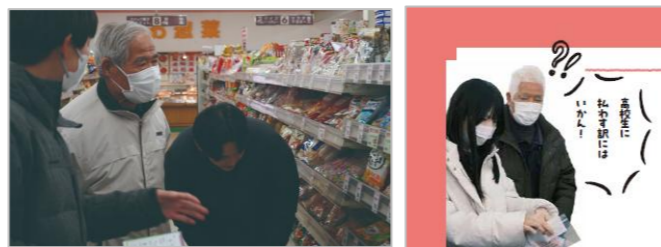
学生

認知症の人

移動(10分) 買い物(30分)

おやつを買いに行く

おやつを買いに行くだけでも、買うつもりのおやつが見つからず、新たなお菓자에挑戦する様子や楽しむ工夫が見られた。何気ない関わりから、役割が生まれた。



支払いの際は高校生に「払わせるわけにはいかない」と気遣う、予算オーバーの際に相談して落とし所を見つける等、買い物をもとにすることで話しやすくなり、自然なコミュニケーションに。

若者と買い物ができて嬉しい。  
ケーキといえば、ショートケーキなのにコンビニでケーキが見つからずロールケーキに挑戦。



認知症の人

食べる(30分)

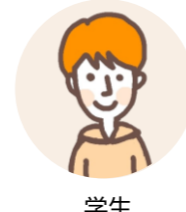
おやつと一緒に食べる

世代が異なるからこそ、普段食べないお菓子を食べて感想の共有ができ、新たな発見と気づきにつながった。そして、笑顔あふれるおかしタイムが実現した。



高校生の勧めにより、じいちゃんにとってはなじみのないグミを食べ、酸っぱすぎて驚く。

塩飴、自分のじいちゃんも食べてた、初めて食べたけどこんな味だったんだー



学生

後日

令和7年12月～令和8年3月

授業の振り返りを  
冊子にまとめた

振り返りを冊子にまとめ、町内に配布する準備を進めている。



振り返り冊子

安定感のある穏やかな空気がこち良かった。いつもと違ってゆっくり買い物ができた。

認知症があってもなくても、だれもがいきいきと暮らしていけるまちだということ伝えてたい。



専門職

学生

認知症の人

● 体制図



取組に参加した人たちの声

高校生と買い物に行けて楽しかった。スーパーでばったり会った友達に「若者と一緒に行こうよ」と言われた。



認知症の人

教科書の講義ではなく、実践的に認知症の人と交流し、考えたことにより、生徒にとって実感的理解につながる深い学びが得られた。



高校の教員

小さな自治体こそ、障害や福祉に壁を作らず、町民全体で連携して実施していくことが大切である。



行政



# 全社員を対象とした認知症サポーター養成講座の開催や介護施設での実習の実施、認知症カフェの運営

## 株式会社アイセイ薬局

### 認知症サポーター養成講座から広がる取組

#### 取組概要

「誠実な気持ちで他者を愛する」という想いを込めて名付けられたアイセイ薬局では、「奉仕のこころ」を社是としている。アイセイ薬局の社員はそれぞれが奉仕のこころを持ちながら、小さな子どもから高齢の方まで、誰しもの健康を支え、地域社会の医療に貢献したいと考えている。

本取組は、地域住民の健康を支える拠点として、また、地域包括ケアシステムの構築を担う一員として、薬局の目線で認知症を考え、認知症の人が安心して暮らせるまちづくりに寄与することを目的としている。

#### 取組経緯

アイセイ薬局では、これまでも薬局の運営を通して、医療・介護の関係機関と連携しながら地域住民の生活を支えてきた。

地域住民との関わりの中で認知症の人との接点も増え、より一層、認知症や認知症の人に対する理解を深めたいと考え、当社内での認知症サポーター養成講座の開催に至った。さらに、座学だけではなく、実際に認知症の人が暮らす場にも足を運んで一緒に時間を過ごすことを目的とし、管理職級等の一部の社員向けに介護施設での実習を行うこととなった。

また、医療・介護の関係機関と連携する中で、地域で開催されている認知症カフェに呼ばれることがあった。薬局での認知症カフェの運営が地域の身近な相談の場づくりにつながると考え、取り組み始めることとした。

#### 行政の役割

アイセイ薬局では、各店舗において、所在する自治体と日頃から情報共有・交流をしている。一部認知症カフェの運営にあたって、地域包括支援センターと協働して実施している。

また、認知症に限らず、「健康」をテーマとしたイベント開催等での連携を図っている。場所や機会があれば薬局から講師等を派遣できることも多いので、自治体の方々には、ぜひ地域の薬局に気軽に相談してほしい。



認知症カフェ

#### 企業概要

本拠地	東京都千代田区丸の内2-2-2丸の内三井ビルディング
社員数	4,428人(令和8年2月1日時点)
薬局数	407店舗(令和8年2月1日時点)
その他運営施設	グループホーム、デイサービスなど

#### 取組詳細

##### <全社員を対象とした認知症サポーター養成講座>

全社員を対象とした「認知症サポーター養成講座」を毎年開催している。定期的な開催を続けてきたところ、地域包括支援センターの職員からの後押しもあり、今では数人の社員がキャラバン・メイトとして活躍している。薬剤師がキャラバン・メイトとして認知症サポーター養成講座を企画・実施することで、より薬にフォーカスした話ができ、地域住民にも新たな視点で認知症への理解を深めてもらえると考えている。

また、さらに学びを深めるため、管理職以上と新入社員を対象とし、介護施設での実習も行っている。認知症の人とともに過ごすことで、「これまでは『なるべく自分がやってあげないといけない』と考えていたものの、認知症の人や施設の職員から『気を回して色々やらないでね』と言われた。認知症になってから何もできなくなるわけではない」といった気づきが得られる機会となっている。



##### <認知症カフェ>

地域づくりの活動の一つとして、いくつかの店舗において認知症カフェを運営している。当社の初めての認知症カフェは、愛知県春日井市の薬局5店舗が協同する形で試行した。そして、コロナ禍の中断を経て、令和6年から松河戸店で再度開始した。

具体的な企画・運営は、各店舗の担当者が日頃から関わっている地域住民の持つニーズを考慮し、検討している。

薬局において認知症カフェを運営することにより、地域住民との交流の場となるとともに、正しい健康情報を伝え、食事や生活習慣等のアドバイスができる機会となっている。また、必要に応じて、病院や地域包括支援センターとの橋渡しもしており、地域との関わりを深くしていくことで、地域の中で頼れる存在となることを目指している。

#### 取組の成果、今後の展望・課題

- |    |   |
|----|---|
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> <li>これまでに認知症サポーター養成講座を受講した社員は2,000人を超えている。</li> </ul>  |
| 展望 | <ul style="list-style-type: none"> <li>認知症サポーター養成講座の受講や介護施設での実習を通して認知症に関する理解を深めた社員たちが、各地域の認知症の人やその家族、自治体、医療・介護関係機関等の声を聴きながら、それぞれの地域に合った取組を進めていくことを目指したい。</li> </ul> |

## 認知症サポーター養成講座

令和4年5月から開始

### 認知症サポーター養成講座

全職員を対象に実施した。  
2,000人以上が受講し、日頃の業務や各地域での主体的な活動につながった。



認知症サポーター養成講座

認知症の人自身も不安に思っているという認識がなかったが、受講を通して、認知症の人への接し方を学ぶことができた。



社員

管理職向け令和7年9月から開始  
新入社員向け令和5年5月から開始

### 管理職・新入社員を対象とした介護施設での実習

介護施設に足を運び、同じ時間を過ごした。



これまでは『なるべく自分がやってあげないといけない』と考えていたものの、認知症の人や施設の職員から『気を回して色々やらないでね』と言われた。認知症になってから何もできなくなるわけではない。



介護職員



管理職



認知症の人

## 広がった取組

平成29年9月から開始

### 認知症カフェの運営

地域住民の相談の場として、自治体等と協働し、地域包括支援センターなどで認知症カフェを運営。



認知症カフェの様子

「会話が難しい」「薬の自己管理ができない」という先入観を持っていたが、認知症カフェでは、豊かに対話し、地域で自立した生活を送っている実像に気づくことができた。



専門職



認知症の人

令和6年12月から開始

### キャラバン・メイトとして活躍

認知症関連の活動を推進するキャラバン・メイトとして、社員が活躍している。



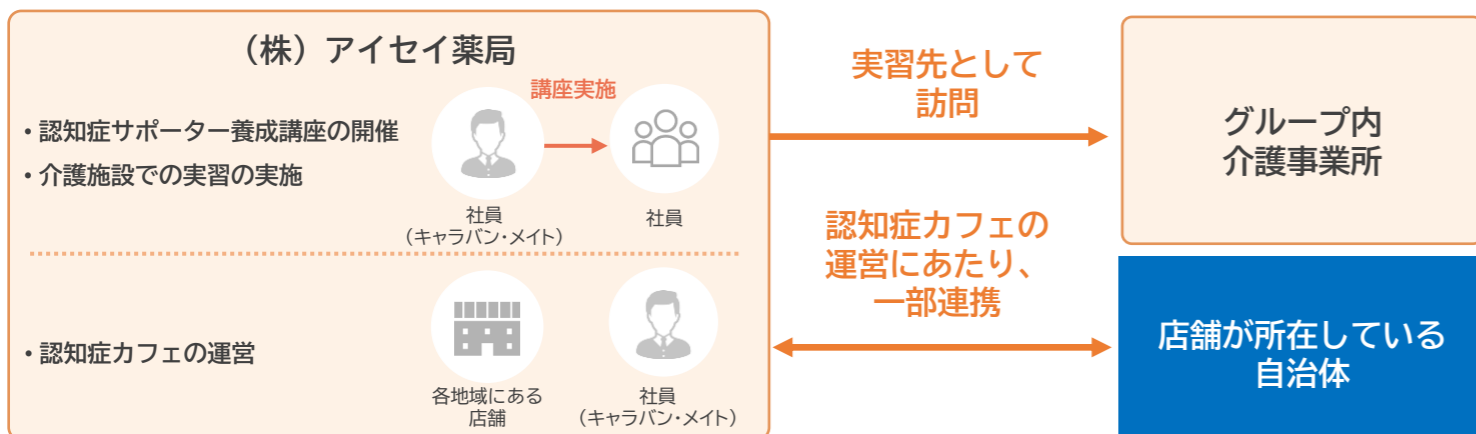
薬局スタッフが地域で活動する様子

同じことを何度もお話しになる方に対しては、「前にも言っていましたよ」などの注意はせず、全部受け取って返答することや、財布からお薬代を出していただくときも「ゆっくりで大丈夫ですよ」などとお声がけして、急かさずに対応することが大切であると実感した。



専門職

## ● 体制図



## 取組に参加した人たちの声

### ■ 認知症カフェ参加者

本人の日常生活での困りごとや、なかなか聞きづらい家族の介護の現状を直接聞くことができ、より一人ひとりに合わせた寄り添い方が必要と感じた。



社員

### ■ 講座の受講者

認知症になると自分の意思で考えたり行動できなくなると誤解していたが、講座を通じて、認知症の人にも尊厳を持った一人の大人であり、それぞれに望む生き方があることを学んだ。



社員

### ■ 取組全体

薬局が地域の「気づきの拠点」として、日常業務を通じて認知症等の変化に気づいた際に、自治体の相談窓口へ適切につなぐことを積極的に実施し、強化していきたい。



管理者



# 認知症の人の「日常」や「暮らし」、「希望」をユーモアのあるイラストや写真で展示

## 神奈川県大和市

### 認知症とともに生きる旅のガイド・写真展

#### 取組概要

本取組は、認知症の人やその家族等だけでなく、市民一人ひとりが認知症を自分ごととして捉え、認知症になっても希望を持って自分らしく暮らし続けられるという「新しい認知症観」を共有することを目的とする。

従来の「制度・サービスの案内」に寄りかちな情報発信ではなく、ユーモアのある写真や映像を通じて、本人視点の“旅（人生の歩み）”として「日常」、「暮らし」、「希望」を描き、認知症の人を「存在」ではなく「隣人・ご近所さん」として感じられる接点をつくることをコンセプトとした。



#### 取組経緯

大和市では、認知症の予防や認知症の人を適切な医療・介護につなげる取組とともに、市民の皆さんが認知症の人への理解を深め、互いに支え合うまちづくりを進めるため、「認知症1万人時代に備えるまちやまと」宣言を平成28年9月に実施した。

そして、宣言に込めた理念をさらに発展させ、認知症とともに歩むまちを市が一丸となって目指すため、令和3年9月に「大和市認知症1万人時代条例」を制定した。

現在、条例に基づき、さまざまな施策を展開している。今回紹介する「認知症とともに生きる旅のガイド・写真展」も、認知症になっても認知症の人やその家族等が安心して地域で暮らせる大和市の実現に向けた取組の一つである。

#### 行政の役割

大和市（人生100年推進課 認知症施策推進係）が主催者として、コンセプト・展示テーマ・表現方針・実施場所等を設計した。若年性認知症の自主グループ「わすれな草の会」の参加者をはじめとした市内在住の認知症の人との対話を継続的に行うなど、本人参画の企画となるように留意した。また、企画の見せ方、導線、媒体の組み合わせ等については、特定非営利活動法人イシュープラスデザインからも助言を得た。

#### 基本情報

場所 大和市文化創造拠点シリウス(1階)やま芸術文化ホール メインホール前  
 日時 令和7年9月25日(木)11時00分～17時00分  
 体制 大和市 人生100年推進課 認知症施策推進係  
 予算 ①本事業の令和7年度予算額:212千円  
 ②本事業の予算の財源:介護予防・日常生活支援総合事業

#### 取組詳細

##### <認知症ケアパス「認知症とともに生きる旅のガイド」パネル展示>

大和市版ケアパスを、パネル展示形式で掲示。認知症になっても人生を歩むための「人」「場所」「制度」等を、すでに認知症とともに暮らしてきた“先輩旅人”の視点で物語仕立てで紹介し、市民が認知症を考える入口として手に取りやすい表現を重視した。

##### パネル製作の経緯

パンフレット形式の場合は、手に取ってページをめくってもらう必要があるが、パネル展示であれば多くの市民の目に触れ、「新しい認知症観」の普及啓発としても活用できる。眺めるだけでも良い。



##### <「先輩旅人の日常」パネル・写真展>

認知症の人の講演登壇など“非日常・特別な姿”だけを提示すると、かえって認知症が身近に感じにくいという課題意識を踏まえ、当事者（市内在住の先輩旅人）の「日常」「暮らし」「工夫」を写真や短いコメントとともに展示した。認知機能低下にまつわるエピソードに限定せず、生活者としての姿を提示することで、市民の共感につなげることを狙いとした。



##### <動画「【新しい認知症観】認知症とともに歩むまち やまと」> ※詳細は後述コラムp.51参照

講話以外の手段で当事者の暮らしや思いを発信する方法として動画を制作し、オンラインでも閲覧できる形で公開した。制作にあたっては、①一人の特別な物語にしない（複数人で構成）、②本人と家族の物語にしない、③地域の人も出演、④制度・サービス紹介に寄せすぎない、⑤身近な場所（公園・自宅等）で撮影、といった方針により、「支援される存在」としてではなく、地域で暮らす一人ひとりとしての姿が伝わる表現を重視した。

#### 取組の成果

##### 成果

パネル・写真・動画を組み合わせることで、市民が認知症を“知識として理解する”だけでなく、“日常の隣にあるものとして感じる”きっかけとなった。

条例制定

令和3年

目指す方向性の  
具体化

「認知症1万人時代」を見据え、地域全体で認知症の人や家族等と価値観や体験を共有しながら、ともに暮らすまちを目指す方向性を整理。

以後の普及啓発や情報発信を「新しい認知症観」の獲得に結びつける土台とした。

大和市認知症1万人時代条例（R3年9月）

地域全体で認知症の人やその家族等と価値観や体験を共有しながら、誰もが自らに関わることで認知症を理解し、それぞれの望む暮らしを続けられる、認知症とともに歩むまちを一丸となって目指す

⇒「新しい認知症観」との共通点



大和市  
担当者

従来のケアパスは、サービスや支援の見通しが立ちやすい一方、要介護状態に至る可能性や、施設サービスが提示されることにより、認知症の人に対して、不安や絶望を感じさせている可能性がある。情報の網羅に注力してしまうことで、ケアパスを読む人の認知症に対するスティグマを強化している側面があるのかもしれない。

ケアパスの再設計、認知症の人との対話、活動

令和4年～

ケアパスの再設計

制度案内中心ではなく、本人視点で「認知症とともに生きる道筋(旅)」を描くというコンセプトで、内容・表現の検討を開始。



従来のケアパスの改善点を話し合う様子

認知症の人との  
対話、活動

～令和6年

認知症の人との意見交換を重ね、必要な情報・伝え方・言葉遣い等を整理。あわせてイシュープラスデザイン等との協働を開始し、読み物としての分かりやすさだけでなく、市民が“自分ごと化”しやすい構成・見せ方を具体化した。



ご自宅での対話の機会



市内在住の  
認知症の人

- 私はよく忘れてしまうけれど、考えることはできます。皆さんの勇気や将来の励みになるものが作れるといいなと思って参加しています。
- 多くの方が冊子を手にとったり、展示を眺めてくれて嬉しいです。人に手伝ってもらえることが多いけど、認知症の自分でも誰かの役に立てるなら何でもやってみようと思っています。

旅のガイド・写真展の開催

令和7年

イベントの開催

認知症とともに生きる旅のガイド・写真展を開催した。



イベントに参加した市民の声

来場者

私が認知症になっても、自分らしさを失わずに暮らすことができそうだと思います。



市民

認知症になったら絶望してしまうんじゃないかと思っていました。でも、明るく楽しく生活されている様子を見て、希望を失うことはないんだと考えられるようになりました。



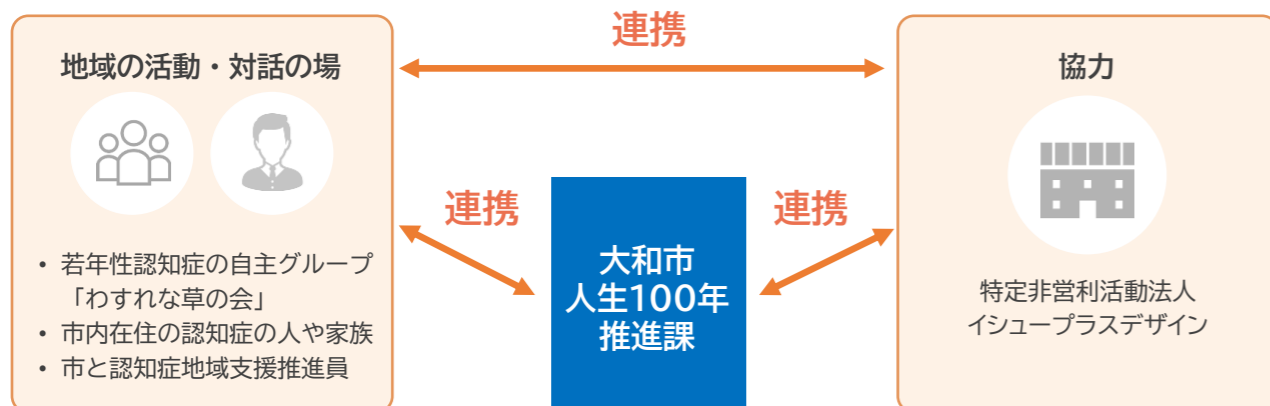
市民

認知症になっても特技を生かしている人がたくさんおられるんだなあ・・・  
すごい!!!



市民

体制図



# 動画制作 「認知症とともに歩むまち やまと」

## 動画制作の経緯・ポイント

大和市と認知症地域支援推進員で構成される認知症施策の作業部会「本人の声を届ける部会」において、認知機能低下の進行の程度に関わらず、認知症の人の日常や活動、思いを講話以外で発信する方法を模索する中で、一つの手段として動画を制作した。

### 動画制作にあたってのポイント

- 一人ではなく複数人（計6名）…特別な一人にしない
- 本人と家族の物語にしない…家族介護を前提にしない
- 地域の人も出演…介護や支援からの脱却
- 法制度やサービス紹介なし…難しく（退屈に）しない
- 撮影場所は公園や自宅…身近さを感じさせる

## 動画の紹介（大和市HPより）

「新しい認知症観」という言葉を聞いたことはありますか。

高齢化で認知症の人が増加する中、国は誰しものが認知症になり得ることを前提とし、認知症になっても支えられるだけでなく、希望を持って生きられる社会を実現するための取組を推進するため、認知症施策推進基本計画を策定しました。認知症施策は、認知症の人の声を起点とし、認知症の人の視点に立って、認知症の人や家族等とともに推進する必要があるとし、「新しい認知症観」は、共生社会の実現に向けて、私たちが理解すべき重要なものであるとされています。

「新しい認知症観」とは、認知症になったら何もできなくなるのではなく、認知症になっても一人一人が個人としてできること・やりたいことがあり、住み慣れた地域で仲間等とつながりながら、希望を持って自分らしく暮らし続けることができるという考え方です。

市では、「新しい認知症観」を市民の皆様と共有するため、認知症の人とともに普及啓発動画を制作しました。ぜひ、大和市公式YouTubeチャンネルをご覧ください。

### 【新しい認知症観】

### 認知症とともに歩むまち やまと

(大和市公式YouTubeチャンネル)

<https://www.youtube.com/watch?v=mPLOrBnbHI>



# 大阪・関西万博 ～HEALTH DESIGN 輝き、生きる。Live Brighter～

「新しい認知症観」を未来へ！

## 大阪・関西万博での出展

厚生労働省では、認知症の歴史を振り返りつつ、VRで認知症の世界を体感する機会を通じて、認知症への正しい理解の醸成を図るとともに、国際社会の評価が高い我が国の認知症施策の普及啓発のため、大阪・関西万博において認知症に関するエリアを出展した。

当エリアへの総来場者数は、9日間で約2.2万人であった。また、アンケート結果からは、VR体験や展示・VTRを通じて、認知症の人の気持ちを理解することができただけでなく、認知症に対する考え方が変わったなど、9割近くが満足と回答した。

今後も、認知症に対する正しい知識と理解を深めるための普及啓発を推進していき、地域の実情に応じた見守りや声かけなど、地域や職域で認知症の人や家族を手助けする認知症サポーターの養成数をこれまで以上に増やしていくことで、国民一人ひとりが認知症を自分ごととして理解し、「新しい認知症観」に立って多様な主体とともに共生社会の実現を推進していく。



展示ブースの様子



認知症VR体験の様子



認知症希望大使による説明の様子

## 展示内容の紹介

当エリアでは、認知症の人が生きる世界・見える景色のVR体験や、認知症とともに希望を持って生きる本人メッセージ、認知症のメカニズムと最新の認知症治療薬などを紹介する展示・VTR等を展示した。当日は、認知症の人本人でもある認知症希望大使が来場者に直接説明・メッセージを伝えた。



認知症の人が活躍している場面のパネル展示と動画

**認知症の人が活躍している場面とは？**

What are the situations in which people with dementia play an active role?

「共生社会の実現を推進するための認知症施策」が「国」が推進している中、認知症の人が自らの力で社会に活躍し、活動することは、共生社会を実現するために重要な一歩です。家族で取り上げている居宅系や介護施設、マステークカフェの他にも、認知症の人が自分らしく生き活躍して、主体的に、生き生きと活躍できる場が全国各所で増えています。

An important step toward achieving an inclusive society is to give people with dementia an opportunity to play an active role in their lives, contributing to the realization of a society where everyone can flourish. In addition to the home care services, supported living and master's cafe, there have been an increasing number of situations nationwide where people with dementia can demonstrate their abilities on their own terms, and play an active role in society.

**生き生きと社会参加**  
生きがいや希望をもち、社会と関わり合いながら暮らすことが大切です。金日本認知症リフトプログラム(Dementiaシリーズ・遊覧・Dシリーズ)は、「やりたいことに動く打ち込みたい、就業し続けたい」という認知症の人が全国各地で活躍している場面に集まっています。試練のほか、交流会などで差別意識のふれあひも生まれ、地域活性化にもつながっています。

**Participating actively in society**  
It is important to give people with dementia an opportunity to play an active role in their lives, contributing to the realization of a society where everyone can flourish. In addition to the home care services, supported living and master's cafe, there have been an increasing number of situations nationwide where people with dementia can demonstrate their abilities on their own terms, and play an active role in society.

**自分のできることを活かして社会貢献**  
その人が持っている個性や能力を活かしながら社会に参加できる取り組みとして、地域で必要とされる仕事をボランティアとして行う「就労的活動」が広がっています。例えば、人手不足に悩む福祉施設で、若年性認知症の人が募りやすい作業など、認知症の人も社会の一員として活躍しています。

Some people have the leverage of their own abilities. This includes activities in which people with dementia can play an active role in their lives, contributing to the realization of a society where everyone can flourish. For example, people with dementia can contribute to the activities of welfare facilities that are short of staff, or take on a job that is suitable for people with dementia. Through such activities, people with dementia can contribute to society as active members of society.



# 認知症の人や家族、専門職が生活の中で実際に取り入れている「くらしの工夫」の展示会

高知市

## 認知症のわたしのくらしのくふう展

基本情報

場所	オーテピア高知図書館
日時	令和7年9月23日
体制	主催:高知市 共催:高知県
予算	認知症施策推進計画に係る策定準備支援事業 174千円

### 取組概要

認知症があっても、日常の中にある何気ない工夫でその人らしい暮らしは続いている。特別ではない日常は、何気ない工夫にあふれている。認知症の人や家族、専門職が日常生活の中で行っている「くらしの工夫」を紹介することで、認知症の人や家族はもちろん、専門職や企業等がそれぞれの立場で感じ取り、認知症への見方が変わり、誰もが暮らしやすい街づくりへとつながることを目指したもの。

これらは特別な支援や費用を必要とするものではなく、どの地域でも取り組むことができる点も大きな特徴である。

### 取組経緯

高知市では、令和5年10月から一体的支援事業「ミーティングセンターKOCHI」の取組を推進している。

ミーティングセンターKOCHIでは、月1回、認知症の人や家族等が集い、やりたいことを話し合い、実際にやってみて振り返るといった活動を行っている。こうした場での何気ない対話の中で、認知症の人や家族が、日常生活の中で工夫を重ねながら自分らしい暮らしを続けている姿が多く聞かれた。これらの工夫は特別な支援ではないものの、暮らしを継続する上で大切な役割を果たしており、認知症があっても工夫しながら生活を続けている姿があることを、多くの人に知ってもらいたいと考えようになった。

そこで、認知症の人が生活の中で行っている小さな工夫を共有し、認知症に対するイメージの変化につなげることを目的に、「認知症のわたしのくらしのくふう展」を企画した。

### 行政の役割

高知市では、認知症に関する普及啓発を高知県と共催で実施しており、今回もその一環として開催した。展示の一つである「希望の木」の制作にあたっては、高知県を通じて県内市町村に呼びかけ、9市町村の参画を得ることで、市町村間の協働やネットワークの広がりにつなげた。

「くらしの工夫」の展示内容は、認知症地域支援推進員等と協力しながら、日頃から関わりのある認知症の人や家族等との対話を重ね、暮らしの中で大切にしていることや工夫を丁寧に聞き取る中で検討を進めた。

なお、本取組は厚生労働省「認知症施策推進計画に係る策定準備支援事業」を財源として実施した。

### 取組詳細

#### <認知症のわたしのくらしのくふう>

ミーティングセンターKOCHIにおける対話を起点に、展示の準備が始まった。

地域で暮らす多様な方々の声を反映させるため、認知症地域支援推進員向け研修において趣旨を伝え、協力を呼びかけた。研修では、日頃の関わりの中で、支援やサービス調整に意識が向きやすいことを踏まえ、「できないこと」に注目するのではなく、「本人がどのような工夫をし、何を大切に生活しているか」という視点で話を聞く大切さを伝えた。日常の暮らしの中で自然に行っている工夫や、その人らしさが表れている場面に目を向けた聞き取りを重視した。

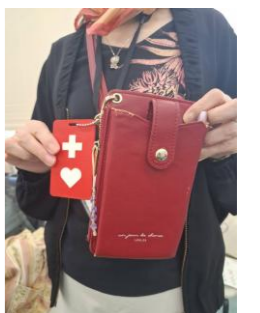
こうした聞き取りや展示準備、展示内容に触れる過程を通して、認知症地域支援推進員自身も認知症の人や家族が工夫を重ねながら暮らしを続けている姿を実感し、できることに目を向け、本人の声を起点とした関わりや地域活動へつなげていく意義を改めて認識する機会となった。

#### <希望の木>

「認知症のわたしのくらしのくふう展」では、日常生活の中での工夫の紹介に加え、「希望の木」プロジェクトの展示も行った。

本取組は、認知症の人や家族、地域の人などが「やってみたいこと」や「大切にしたいこと」をリーフに書き、希望の木につなげていくものである。単に思いを共有するだけでなく、聞き取った希望は、周囲の人とともに実現につなげていくことを大切にしている。

高知県の呼びかけにより香南市や黒潮町など他市町村にも取組が広がり、医療機関や介護事業所の協力を得ながら、計9市町村等で希望の木が制作された。



認知症の人ご本人による工夫



図書館にて展示された希望の木

### 成果、今後の展望・課題

成果

認知症の人・家族・専門職などから日頃の暮らしの工夫を聞き、整理することで、普段一緒に活動している仲間同士の相互理解を深めることができた。また、地域包括支援センターの総合相談においては、認知症の人と関わる中でサービス調整が中心となることが多く、日常生活の工夫や暮らしの様子に焦点を当てて話を聞く場面は多くはなかったが、本企画を通じて、できないことに目を向けるのではなく、暮らしを続けるためにどのような工夫をしているのかを聞き取るきっかけを得ることができた。

展望

展示会には70人が来場し、来場者の認知症観の変化にもつながった。今後は、パネル貸出を活用し、ほかの地域での展示等を行うとともに、認知症の人の日頃の暮らしや工夫、声に目を向ける機会として継続していきたい。

## 準備

令和7年7月

### 認知症地域支援推進員向け 研修での共有

イベントの趣旨を共有し、認知症の人や家族の日々の暮らしのヒアリングを行うため、どのように声を聞き取るかを共有した。



<ヒアリング前>暮らしの中での工夫に関するイメージができない。どのように聞き取って良いかが分からない。  
<ヒアリング後>ほかの人の「くらしの工夫」のパネルを見て、日頃、何気なく聞いている工夫に注力していなかったが、実際には、くらしの工夫はたくさんあるとの気づきが得られた。



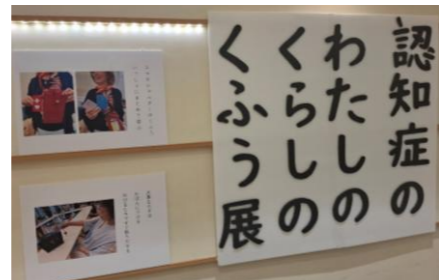
市職員

認知症地域支援推進員

令和7年7月～9月

### 「くらしの工夫パネル」と 「希望の木」の制作

認知症地域支援推進員が医療機関や介護事業所等と協力しながら、「くらしの工夫」と「希望」を聞き取り、「くらしの工夫パネル」と「希望の木」を制作。



制作したパネル



認知症の人

家族

認知症地域支援推進員

専門職

## イベント当日

令和7年9月

### 展示とともに トークショーを開催

本人・家族・有識者が登壇するトークショーを開催し、どのように工夫を見つけているか等を伝えた。



9月23日に開催したトークショー

今まで感じていた認知症とは違う捉え方ができた、認知症に関するイメージが変わった。

メディアで観ていた認知症に関する印象とは違った。自分にも「今からできる工夫があるんだな」と思えたから、参考にしていきたい。



市民

市民

## 後日

令和8年2月

### 認知症地域支援推進員向け 研修での振り返り

認知症地域支援推進員向け研修において、9月に開催した展示会の振り返りを行った。

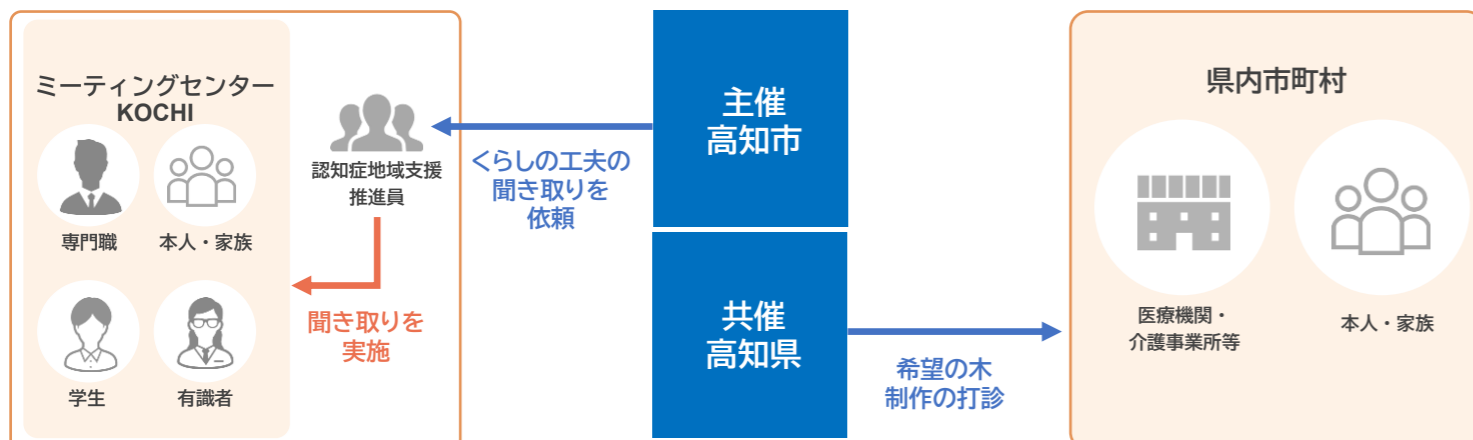


何気ない日常の中に認知症と診断されているからこそ、皆が感じる希望や当たり前にしていく日常の暮らしの工夫を見逃しがちであった。そういう視点で本人の思いや希望を聞き、ともに実現していきたいと感じた。



認知症地域支援推進員

## ● 体制図



## メッセージ

### ■ 高知市役所

認知症の有無に関わらず、誰も苦手なことや困りごとを抱えながら、日々の暮らしの中で工夫を重ねて生活しています。認知症の人も同様で、周囲と互いに補い合いながら、その人にできることは役割として担ってもらうことが大切だと考えています。

「認知症になったら何もできない」というイメージを持たれがちですが、実際に一緒に過ごしてみると、その人なりの工夫を重ねながら日常生活を送っている姿が多く見られます。できない部分だけを見るのではなく、目の前の本人に目を向け、その人がどのように暮らしているのか、暮らし全体を見てもらいたいと思っています。



# 認知症を「遠い話」ではなく身近な出来事として知り、理解を深める

## 公益社団法人 認知症の人と家族の会 こども向け認知症サイト

### 📍 取組概要

本取組は、次の社会を担うこどもたちが、認知症を「遠い話」ではなく身近な出来事として知り、理解を深める入口をつくることを目的とする。核家族化等により高齢者との接点が乏しいこども世代が、地域で認知症の人（若年性認知症を含む）と出会った場面を想定し、相手の立場を踏まえた関わり方を学べるよう設計されている。小学生向けは“日常場面×選択肢×解説”で行動のイメージを持てる構成、中学生向けは「自分だったらどうする／何ができる」を考える要素を重視し、主体的に学ぶ構成としている。

### 🏠 取組経緯

家族の会の中で、こども世代に向けた啓発の必要性が継続的に認識されてきた背景があり、過去に作成した教材の内容が現状に合わなくなってきたこと等を踏まえ、更新・再整理の一環としてサイト化に至った。企画は本部提案を起点に、関係者で協議し、本人・家族・専門職・教育関係者等で構成されるワーキンググループを設置して内容を具体化した。

### 🤝 行政の役割

本取組は、普及・活用にあたり行政（自治体・地域包括支援センター等）と積極的に連携しながら進めている。具体的には、地域包括支援センターが実施するこども向け認知症サポーター養成講座等で、本サイトのストーリーや設問を投影・配布して、教材として活用する取組が見られる。

また、自治体の普及啓発の枠組み（認知症基本法の趣旨を踏まえた啓発、地域の理解促進活動等）と接続し、こども・保護者・地域住民が参加する学習機会の中で紹介・活用することで、認知症を身近に捉えるきっかけづくりにつなげている。



### 📖 取組詳細

#### <小学生向け 認知症こどもサイト>

身近な生活場面を題材にしたストーリーと二者択一の設問で、こどもが「このときどうする？」を考えながら学べるWeb教材。設問回答後の解説で、認知症の特性、相手を驚かせない伝え方、責めない関わり、安心につながる声かけ、困ったときに大人へ相談する手順等を知ることができる。

認知症の基礎をQ&Aで学ぶ導線もあり、理解→行動のイメージ化を支える。教育機関等での授業で投影・印刷して使えるよう、展開例や留意点をまとめた指導者向け資料も備えている。



#### <中学生のための認知症サイト>

価値観や家族・地域との関わりを自分の言葉で考えられる時期に合わせ、「自分だったら何ができるか」を深めることを重視したWeb教材。特定の一事例に固定せず、疑似体験と問いかけを通じて、認知症の人の見え方・感じ方を想像し、知識の理解に加えて対話と振り返りを促す。

学びの最後に、自分の行動宣言や周囲への伝え方を整理できるよう、考察のヒント、キーワード整理、活動例も示し、授業や地域包括支援センター等の研修で活用できるよう設計している。



### ✓ 取組の成果、今後の展望・課題

- |    |   |
|----|---|
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> <li>こどもが認知症を「怖い・分からないもの」ではなく、同じ地域で暮らす人の課題として捉え直し、相手の立場を想像して関わり方を考えるきっかけとなっている。特に、小学生向けは日常場面のストーリーと設問で行動をイメージしやすく、中学生向けは「自分だったらどうする／何ができるか」を自分の言葉で考える学びにつながっている。</li> </ul> |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> <li>一方、普及面では、学校での採用が教育委員会等の判断に左右され一斉導入が難しいことや、授業カリキュラム・教員負担との調整が課題となる。</li> </ul>  |
| 展望 | <ul style="list-style-type: none"> <li>そこで今後は、行政との連携をさらに深め、こども食堂等の地域の居場所での案内や学びの機会づくりを行っていくことを検討している。あわせて、小学生／中学生向けの次のステップとして、その上下世代向けの展開も視野に入れ、社会状況を踏まえて必要なコンテンツ制作を行う方針である。</li> </ul>                       |

## 制作活動

令和3年4月～

### ワーキンググループの設置

本人・家族・専門職・教育関係者で構成するワーキンググループを設置した。



こども向け認知症サポーター養成講座の様子

認知症に対して学校で教えるのは、医学的な症状よりも認知症の方に対して人としてどう接していったらいいのか、という道徳的な部分がすごく大事なことだなあと思うんです。



認知症の人

家族

専門職

教育関係者

令和3年12月～

### 対話を通じた制作

サイト制作にあたって、京都市内のこども、専門職、認知症の人から話を聴く機会を持った。会報にて座談会の様子を報告し、認知症の人・家族にも活動を広報した。



京都市内の小中学生・会員との意見交換の場

認知症の学習とともに、ものの見方・考え方には多様性があることも学んでほしい。

## 公開・活動・更新

令和4年4月～

### 全国の教育機関等での活用

Web教材として公開し、活用した学校・地域からの感想・アンケート等のフィードバックを得ながら、活用法や場所、今後の改善点などを検討している。

令和4年4月～

### こども、親、教育現場の認知症観の変化

子世代だけではなく、その親世代や教員などの認知症観の変化に繋がっている。



小学生

近くで認知症の人や障がいのある人を見かけたら、とりあえず見守って、大変なことになりそうだったら、相手の視界に入ってからやさしく声をかけたいです。



中学生

認知症の人と出会ったらやさしく対応して、その人の不安に共感してあげると認知症の人が安心することが分かった。近くに認知症の人がいれば、今回学んだように接してあげたい。



親世代

認知症の人の気持ちを分かりやすく学べて、思いやりの気持ちが自然と育つ教材だと感じました。多くのこどもたちが親しみながら学び、思いやりの心が広がることを期待します。



教員・指導者

体験ストーリー後にクイズで質問しながら進めました。こどもたちの学習能力の高さと柔軟な思考、偏見のない無垢な反応に、児童期から認知症理解に取り組接することの重要性を痛感しました。

## ● 体制図



## メッセージ

### ■ 公益社団法人 認知症の人と家族の会

本サイトから学んで、困っている人に何か手助けをしようと思う気持ちが起き、それが行動となること、思いやりのあるやさしい人となることを願い作成しました。

「認知症の人と家族の会」は「認知症になっても安心して暮らせる社会」「認知症とともに生きる社会」を目指して活動しています。そのような社会づくりに、こどもたちも一緒に参加してほしいと願っています。



# 認知症の人が生きる世界の豊かさに突き動かされた学生たちによる作品の制作・展示

慶應義塾大学・早稲田大学

## だいたいおっけー展

基本情報

**場所** 福岡市認知症フレンドリーセンター  
**日時** 令和6年9月10日(火)～開催中 ※ 令和7年1月12日(日)～1月13日(月・祝) 福岡市科学館にて巡回展を実施  
 開催レポート:<https://www.fukuokacity-kagakukan.jp/news/2025/02/daitai-ok.html>  
**体制** 共催:慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科 堀田聡子研究室、一般社団法人 人とまちづくり研究所、早稲田大学基幹理工学部表現工学科 橋田朋子研究室 協力:福岡市認知症支援課  
**HP** <https://daitai-ok.studio.site/>

### 取組概要

認知症の人が日々を生き抜くために「代替」可能な工夫を編み出し、現状を「だいたいおっけー」にしていく姿に驚き、感動した学生らが、認知症の人との交流を重ねて作品を企画・制作し、福岡市認知症フレンドリーセンターで展示会を開催。作品の企画・制作プロセス及び体験型の展示を通じて、制作チーム、展示会の来場者、さらに認知症の人や家族の認知症/認知症の人との「出会い直し」につながり、福岡市科学館にて巡回展を実施後、センターにて展示が継続されることになった。

### 取組経緯

だいたいおっけー展のはじまりは、認知症とともによりよく生きる未来を目指す活動体「認知症未来共創ハブ」の認知症の人のインタビュー。「認知症当事者ナレッジライブラリー」や「認知症世界の歩き方」プロジェクトとして送り出しながらも、改めて認知症の人の想いや体験に向き合いたいと、88人分の語りの文字起こしを研究者と専門職で再検討し、「生活のなかでのちょっとした楽しみ・こだわり」「暮らしの知恵」等4つのテーマでエピソードを抽出した(～令和5年度)。福岡市認知症フレンドリーセンターの協力が得られることになり、展示企画が始動。認知症と接点がない/必ずしもポジティブな印象を持っていないが、だからこそ認知症の人の語りに興味を持った学生4人が制作チームに参加した。

まずたくさんのエピソードを読み解き、福岡市認知症フレンドリーセンターを訪ね、それぞれ認知症の人との交流、自宅訪問、インタビュー等を行い、アイデア出しや試作を開始。認知症の人からのフィードバックも得てブラッシュアップを重ね、4作品を制作・展示することになった(令和6年度)。

### 行政の役割

認知症の人の語りの読み解きを手がかりにした展示をしてみたいという投げかけに、福岡市認知症支援課及び福岡市認知症フレンドリーセンターが賛同。当事者スタッフや若年性認知症支援コーディネーターが制作プロセスに参画し、展示スペースの提供、展示の周知、来場者への案内、展示のメンテナンス等に全面的に協力。当初令和6年9月～12月の展示を予定していたなか、センターでの展示継続を決め、認知症に関心がない方にも体験してもらえるよう、福岡市科学館での巡回展示の実施に向けても尽力。



福岡市認知症フレンドリーセンターの一角で展示



制作チームと福岡市内の協力者

### 取組詳細

生活の場で耳を傾けてきた認知症の人の語りのうち、88人分の文字起こしから抽出された2,600以上のエピソードが展示企画の起点。手をあげた学生4人を中心とする制作チームのメンバー(理工系のメディア研究等を行う学生・研究者、デザインリサーチャー)は、まずこれを文章として読み、ハッとしたエピソードや表現のアイデアを持ち寄った。

認知症になったらなにひとつ分からなくなる、怖くて悲しい、認知症になったら終わり…といったイメージを持っていた学生たちは、認知症の人の日々を生き抜く知恵とユーモア、認知症の人が生きる世界の豊かさに驚き、そして認知症の人と出会い、ともに過ごし、交流を重ねながら、伝え方や体験のデザイン等のアイデアをブラッシュアップ。最終的に、以下の思いのもと、4つの体験型の作品を制作し、展示会を開催した。

私たちは、認知症とともに生きる方々が、変化する自らの現状に向き合い(そうなんです)、苦手なことが増えても折り合いをつけたり(まあいっか)、これだけはこだわりたい、手放したくないと踏ん張ったり(たまるか)しながら、「これまでのやり方」とらわれない、「代替」可能な方法を編み出し、「だいたいOK」と思える新たな地平を拓いているように思いました。  
 認知症の人が生きる世界の豊かさに突き動かされて制作した作品を、ぜひお楽しみください。



そうなんでスタンプ

認知症の人が変化する自らの現状に向き合った上で、折り合いをつけたり、踏ん張ったりする姿勢に感銘を受け、日々のエピソードを自分ごと化して持ち帰ることができる作品。



新たな料理のさしすせそ

認知症の人のさまざまな料理への向き合い方を、料理の基本「さしすせそ」になぞらえて紹介している作品。



もしもを楽しむカード

認知症の人が、日記を通じて自分のエピソードを再構築しながら生活していることに着想を得て制作した、実際にあるかもしれない「もしも」の出来事を空想して楽しむための装置。



2個あるんです掲示板

認知症の人が同じものを買わずに、その状況をポジティブに捉えられる工夫をしていることに着想を得て制作した、2個以上買ってしまったものへのアイデアを共有する掲示板。

### 取組の成果、今後の展望・課題

- 成果**
  - 学生が、認知症の人と出会い、驚きと感動をもとに作品を企画・制作するプロセスで、認知症に関する思い込み、自らの持つさまざまな固定観念に気づき、新たなものの見方や考え方ややり方を多くの人たちに知ってほしいと願い、実現。また、これを契機に生まれた認知症の人との交流が継続。
  - 来場者・関係者が、作品の体験や対話を通じてじっくり考えたり、共感したり、日常に採り入れられそうな工夫や発想の転換、自由なアイデアを楽しみ、認知症観の変化を経験。
- 展望**
  - だいたいおっけー展の成果を踏まえ、学生が認知症の人との交流をもとに認知症の人との出会い直しのアイデアを生み出すプロセスを大学院の授業の一環として試行(平成7年度)、ブラッシュアップ・継続予定。さらに、各地の子ども・若者たちが地元の認知症の人とともに過ごし/認知症の人の語りに触れ、その発見から認知症への新たな入口となる作品の企画・制作に取り組むプログラムの可能性を検討中。

# 認知症へのイメージの変化

## 認知症の人の語りの蓄積・分析

## 展示企画・制作

## 展示開始

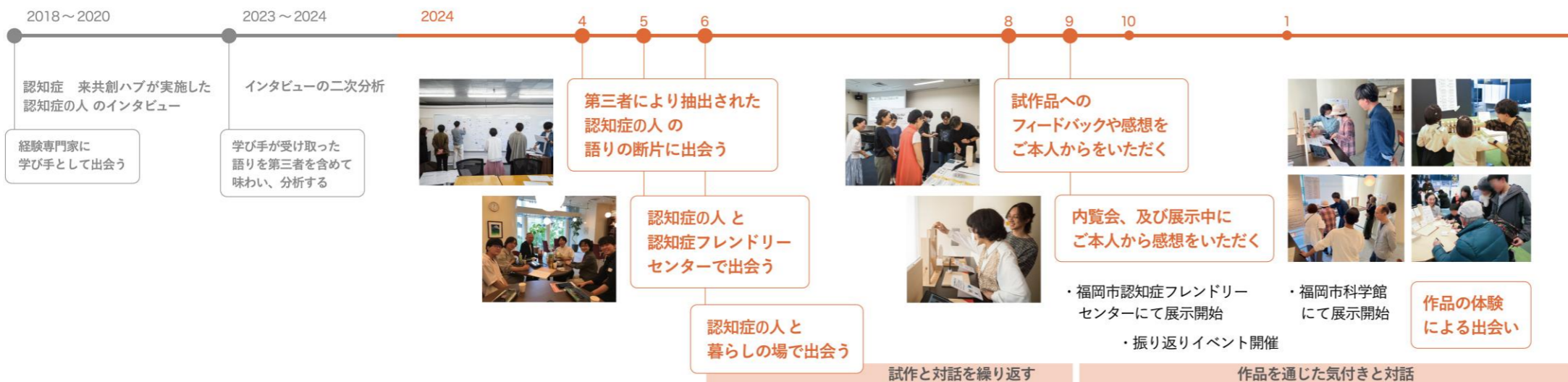
## 3か月後

### 認知症や認知症の人との出会い方

インタビューメンバーの出会い 分析メンバーの出会い

展示制作メンバーの出会い

鑑賞者の出会い



## だいたいおっけー展 振り返りトークイベントを開催

制作・展示のプロセスを通じた学生たちの「認知症」に対するイメージの変化、対象と出会い直す体験のあり方等について、制作協力くださった認知症の人を交えてトーク。



振り返りトークイベント

認知症になると本人も周りも大変そうなイメージ。  
これまで縁がなかった「認知症の人」の語りのデータが大量にあるなら、おもしろそう！



忘れてしまってもいいように新しいツールを取り入れたり、物事に向き合う姿勢を柔軟に変えたり…  
自分なりの知恵や工夫で乗り越えているのがすごい！



『味噌が入ってなくても味噌汁』と思えたら、どれだけ気が楽だっただろう（介護経験者）



そうなんでスタンプのエピソードは、いつも私が思ってることと一緒にでした。めっちゃ身近に感じた！（高校生）

認知症の人が直面していることをちゃんと知らなきゃいけない側面もありつつ、「認知症になってもいいな」って思ってる自分がいます。



### 来場者／関係者の声

（そうなんでスタンプを体験した後に）自分と同じ経験をしている人とつながりが持てた気がする



「もしもを楽しむカード」があれば、間違いを恐れてしゃべらなくなった母も、自由に話せるかも！



認知症になっても暮らしを楽しんでいけるんだと思いました。何事も前向きでありたい！



認知症への思い込みやイメージがほぐれました。（認知症フレンドリーセンターは）行政の取組と聞いて構えていましたが「あ、こんな感じでいいんだ」と肩の力が抜けました。



「認知症のことを難しく考えすぎず、日常の中で自然に受け止めていきましょう」とお話しても、なかなか伝わりにくいですが、展示で説明・体験してもらえると、とてもありがたかったです。

### その後…

## 授業の一環として、学生が認知症の人と過ごす経験から認知症に対する「新たな入口」をデザイン



完成した絵本をめだかの会の皆さんに贈呈

制作チームメンバーが担当する授業で、東京都品川区の「めだかの会（認知症の人と家族の一体的支援事業）」の協力を得て、受講者が認知症の人や家族との交流のもとに、認知症の人との出会い直しのさまざまなアイデアを発想。本人と家族の物語を『ふたりのごっちゃませ』という絵本にまとめた。

令和7年度 厚生労働省 老人保健健康増進等事業

「認知症施策推進基本計画に基づく認知症施策の推進のあり方に関する調査研究事業」  
普及啓発・バリアフリー関連ワーキンググループ

委員名簿（50音順・敬称略）

氏名	所属先・役職名等
芦野 正憲	公益社団法人認知症の人と家族の会 理事
笠井 浩一	福岡市 福祉局ユマニチュード推進部 部長
澁澤 一樹	株式会社アイセイ薬局 薬局事業支援本部 次長
高橋 徹至	各務原市 健康福祉部高齢介護課高齢福祉係 係長
戸上 守	一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ 副代表理事
◎堀田 聡子	慶應義塾大学大学院 健康マネジメント研究科 教授
矢吹 知之	高知県立大学 社会福祉学部 教授

◎=WG座長

事務局：株式会社日本総合研究所

令和8年3月